

こんなことが区民のためになるか！

市民学習センター廃止・市岡商業跡地売却・小学校統合…

「市民学習センターを廃止」「市岡商業跡地を売却」「小学校を統合」。年末年始、こんなニュースのオンパレードに「港区はこれからどうなるんや」と暗澹たる気持ちになった区民も多かったことでしょう。「市長の正体見たり」と指摘する人もいるように、結局これらは「採算」「効率」「自由競争」「民間活力」を掲げながら、実際には財界に目みのある大阪に変えてしまおうという「市政改革」の当然の帰結といえます。とはいえこんなことを許していたら区民や区役所のまちづくり努力も水の泡。そこで、これら施策の何が問題なのか、一緒に考えてみましょう。

「採算」「競争」掲げて地域破壊の市政改革に区民危惧

問題はいくつもありますが、特に港区民に影響があると思われる3点に絞って考えます。

まず、この一月、「弁天町・城北市民学習セン

ターを廃止します」との告知が「おおさか掲示

板」（大阪市政情報）に掲載されました。それに

よると、①市内五館のうち弁天町と城北を三月

末で廃止する②その二館での四月以降利用分の

貸室交付は行なわない—という計画です。

◆市民学習センター「存続を」の声をあげ

これは「市政改革プラン」(二〇二二年七月策定)に基づく決定で、理由は「(賃借料など)コストが高いから」とされ、市は当初、難波を含む三館の廃止で三億四百万円の削減効果を見込んでいましたが、市民の声を受けて「館廃止としました。そのうちの二館に弁天町が入っていましたから」というのではなく、このような決定に至る過程そのものに大きな問題があります。

弁天町市民学習センターは平成五年に設立され、大阪市教育振興公社が市から委託されて管理運営を行ってきましたが、これまで二十年以上にわたって多くのグループや個人が利用し、生涯学習、生きがいづくり、人間関係づくりなど様々な目的を実現する場として機能してきました。また各小学校区にある生涯学習ルームとは重なる部分を持ちながらも、メニューなどを補い合い、刺激し合いながら、地域の生涯学習を充実させてきました。さらに教室運営への助言をするなど市民と一体でこのセンターを作り上げ、この四年間に利用率を五割上げたスタッフの献身的な努力も見逃すことはできません。いつしか、いわば市民の手作り財産ともいえ

「弁天町市民学習センターは様々な学びや発表の場となってきた(上は朗読、下はコーラス)」



る場がなくなることは地域の本質的な損失であり、廃止と売却の先にある民間経営がとって代わるものではありません。それゆえ、その収支が赤字であれ黒字であれ、むしろ充実・発展させる方向でこそ考え直すべきでしょう。市区民からは「存続を」の声が今も続いています。

結論として、「弁天町」にしろ「城北」にしろ、地域にかけがえのない役割を果たしてきた学習センターの廃止は市区民にとって百害あって一利なし、大阪市は直ちに撤回すべきです。

◆市岡商業「建物を生かそう」の訴え

次に、やはり一月「市岡商業高校跡地の活用

に係る調査について」との告知が「広報みなと」に掲載されました。それによると、①大阪市の同跡地の売却を予定②売却に先立ち跡地活用についての意見や提案を民間事業者に広く求める市場調査を実施している③調査の結果は一月下旬ごろ公表する④区民の意見も聴きながら売却条件を検討する—というわけです。

そもそも二〇二二年の廃校については区民から「港区から文教施設がなくなるのは青少年に良くない」「統合するなら港区に」「統合は競争激化につながる」「財政のツケを子に回すな」「財政難が理由なら不要不急の大規模開発をやめよ」などの声が起こり、地域における学校の存在の重要性がかえって浮き彫りにされました。

その後、跡地については区民の間で「防災拠点にしてはいい。商業施設に」という意見もあるが、港区の活性化にはつながらなかったオークなどの失敗をまた繰り返すのかと言いたい「弁天男性」「停滞している『港地区復興千地区画整理事業』の記念施設建設予定地(機設路と等価交換して本格的な文化施設を造り、東の中央公会堂、西の港公会堂)とすれば全体的な活用

を図れ、港区と大阪市の文化発展に大きく寄与できるだろう」（田中・男性）「建物をそのまま使い、色々な催しを通じて触れ合える世代間交流の場としてはどうか。費用も手間もかからず、すべ実行に移せる。一番現実的な活用法だ」（田中・男性）などの意見が交わられていました。

一方、土地所有者である大阪市（教育委員会施設整備課）は「跡地をどう活用するかはまだ白紙。スケジュールも未定。地元の意見をよくくみあげながら論議し、決定していくことになる」との二年三月と述べていました。

しかし、このほど報じられた内容は、こうしていた市民と行政間の関係や経過を無視したもので、特に①「売却を決定した」という一方的な結論②「意見や提案を民間事業者に求める」という企業重視・住民軽視の姿勢③「調査結果を二月中旬に公表する」という性急な進め方―は「市民協働」とは程遠いものです。こんなやり方をしてまで売却を進めるのは結局、売却益による一時的な財政改善しか目に入っていないからでしょう。

結論として、曲がりなりにも大阪市が「市民協働」を叫ぶのなら、こうした決定はいったん

↑どう活用するかが区民の関心を集めている市

岡商業高校跡地（上は全景、下は正門前）



撤回し、少なくとも「売却」を前提としない自由な市区民議論の場をまず設けるべきです。

◆「子供は地域で育つ」の声に逆行

さらに、やはり二月、「小学校の配置や規模の適正化について」との告知が「広報みなの」に掲載されました。それによると、①小規模校ではクラス替えがでずくに人間関係が固定化する傾向にあり、体育などの集団活動が困難な場合もある②大阪府はそうした課題の解消を図るため十一学級以下の小学校を適正配置（統合）の対象としている③港区では十一小学校のつち池島・磯路・八幡屋・築港・港晴・南市岡の六校が対象となる④今後は児童数の推移を注視し住民の

理解を得ながら検討を進める―としています。

この問題については、二〇一二年春・夏に学校選択制（指定校区以外の小中学校へも行ける制度。港区では今春から中学校で実施）を巡って交わされた区民議論が参考になります。本紙も「紙上討論」といつ形でその一翼を担いましたが、その中では学校と地域の関係についての次のような意見が出されました。

「小学生の頃、土曜の午後に学校の講堂でPTAのお母さんたちと卓球に興じた経験などから地域への思いも自然と育まれ、親となつてからはそんな地域への恩返し（へんがし）の気持ちもあってPTA会長などをさせて頂きました。現在も地域で様々な活動に取り組み、地場産業の業者から仕事の苦労や歴史を教わったり、小規模校であることを活かしてきめ細かい花づくりを行なったりしています。そうして何十年も校区を単位に（うちか）培われてきた地域社会をバラバラにさせてはなりません」（元PTA会長の男性）

「父が駅長をしていた関係で何度も転校し、友達と離れる辛さ（つらい）を身にしみて感じてきました。また見守り活動の中で、地域と子供の結び

つきの大切さを肌で感じてきました。そんな経験から、子供は家に近い学校で保育園・幼稚園時代からの友達と机を並べ、近所の子と遊び、生まれた土地を好きになることが何より大切だと思っています」(子ども見守り活動の男性)

「学校では助け合い・励まし合い・伸ばし合いが必要であって、競争、それも点数や順位を争うような競争は決して子供のためになりません。そうした選択と競争の先に、子供たちが学校と地域を繋ぐ『学校統廃合』があるのでは危惧します。学校と地域の関係を、子供の健全な成長という面からこそ考えるべきです」(小学校PTA役員の女性)

「わたしの声に共感するのは「子供は地域でこそ育つ」という実体験に基づく確信です。が、今回の「小規模校を統合する」という方向はそれに全く逆行するもの、つまり「学校選択制」と同じく、地域と子供を切り離すものです。

大阪市は小規模校であることのマイナス面として「人間関係の固定化」や「体育など集団活動の困難」を挙げていますが、小規模校であることは「人間関係の親密化」や「集団活動の緊密化」、そ

「子供は地域で育つ」(写真上は田中小児童の集団登校風景、下は池島小の正門付近)



らには「教育の質の向上」にもつながる要素であり、そうしたプラス面を無視した一面的な理由で、しかも「十一学級以下」という形式的な面を目安にするというのは、子供の立場を全く考えない暴論と言わざるを得ません。結局は統合による教育「コスト削減」こそが目的なのでしょう。

結論として、「学校選択制」に加えてますます子供を地域から切り離すことになる「小学校統合」の検討を、大阪市は直ちに中止すべきです。

◆公の責任できつちの仕事を！

以上、見てきたように、「わたらの施策や決定に共通して流れているのは「事業」として採算が

とれなければ意味がない」「効率の悪いものは切り捨てる」「自由競争こそ発展の原動力」「民間活力を活用しよう」といつ、社会を今日のよつに拝金と弱肉強食で荒廃させてきた思想そのものです。これは橋下氏が始まった考え方ではありませんが、その度合いが大阪では段階を画して強まっていることを市区民は危惧しています。

「賃借料が高い」と文句を付けるなら値上げ交渉を市が前面に立つて行なえばよいのです。「収支不足」「コスト削減」とせっつくなら「カジノ誘致」「リニア鉄道」「道頓堀プール」など市民には白害あつて財界だけが喜ぶプランをこそ中止すれば財源は生み出せるのです。「市民協働」「区民主体」を唱えるならいくつかの問題、いその見本を見せてほしいもの。「民間活力」をいつなら財界ではなく地域の人々の中にこそ知恵と力を見出すべきです。

戦後の国政が生み出した根本的な財政難の中でも、市はその気になれば、なお市民生活の防波堤としての役割を果たせるはず。何も特別なことではなく、公の責任できつちの仕事をやっていくというのを市区民は望んでいるのです。

あ
さ
や
け

物々しい警備態勢に「何でやねん?」。成人の
日(19頁)の朝、会場の井大町オーク周辺では
私服警官が張り付き、式場内でも「壇上」に近づ
かないで「後方から撮影を」とかつてない報道
規制。式が始まって分かりました。橋下市長の
「来港」です▼そんな中で始めた祝辞の半
分は「大阪都構想」のPR。その是非はともかく、
また要人に一定の警備は当然だと承知してもし
ましたが、それでも何か腑に落ちぬもの、とい
うか「異様な空気を感じたのは筆者だけでは
なかったようで、式運営に携わる関係者の表情
には例年にない硬さが見られました。更にそれ
は全国の特徴でもあったようで、パトカーで警
官が駆け付けた「下関市」など他自治体でも同
様の光景が見られたことが報じられていました
▼思つに「空気が」といつのは正直なもの。時代
が向かう先を的確に教えてくれます。昨年の「特
定秘密保護法」に代表される政治の動きがこつ
した空気の底流を成っているとは間違いない

でしょ。戦争体験者が最近の情勢を「あの頃
 に似てきた」と危惧（おそろし）するものもこの空気を肌で捉え
 ているからに他なりません▼そんな戦争世代
 の敏感さには足元にも及びませんが、戦後生ま
 れで自他共に認める鈍感人間の筆者にもこれ
 に関連して感じたことがあります。それは例年
 なら式のとある中学校の懐かしのスライド上映
 や恩師の登壇で盛り上がっていたのが今年はや
 くなり、早々に解散させられたこと。これを「寂
 しく」と思っただけでなく、あの異様な空気に通じ
 るものがあるのは、果たして杞憂（きゆう）でしょうか。

「驚備」てな言葉が出ましたので、それに引つ
 かけた小 啣こはなを▼寒うなつてまた鼠ねずみが出没す
 るようになりまして。米のビール袋を破るや
 ら止月の餅もちを齧かじるやら、牛乳石鹼しせんを運び去るや
 らミ箱みかんを倒して蜜柑の皮を食つやら、その罪
 状を逐一いちいち挙げていては大河ドラマになつてし
 まつぽい。そこで家族版NSC(国家安全保障会
 議)を開いて「驚備態勢」を議論。①夜中は食物の
 痕跡を残さない②鼠捕り器を置く③鼠が嫌が
 る音波を発信する④鼠が嫌がるフレーを散布

する。なごきえつく限りの対策を講じました▼
ところが敵もさる者。ゲリラ的に現われては天
井裏へ戻り、運動会を催して健在を誇示。中で
も②に全く反応しない慎重さは鼠小僧か怪人二
十面相か、敵味方を越え拍手喝采▼てなことゆ
うなる場やありませんが、この間のバトルを
通じて感じられてきたのは、鼠にはイルカなど
と同じく人に対する親近感があるのではという
こと。そんな迷惑かけませんから一緒に暮らせ
せてよという訳です▼ならばうちも哺乳類の
長として無碍に断るのも大人げないじい。そこ
で再びのNSCで確認したのは「警備は解かん
がその目へいづらも立てまじ」といつ姿勢。この寛
容さに応えて少しは動きを控えてくれると期待
したのでした▼聖書には「獅子も臺を食む日が
来る」といつ意味の句があります。全ての動物と
平和共存できる日が来ることを筆者も信じてい
ます。が、その簡単に行かんのが今の世の中。
それが証拠に捕鯨やイルカ漁が紛争の種になり、
うちでも二度のNSCはいんな激論が。もつ我
慢でん、猫を飼お「いや、あへまて共存や」。
やっぱ人間じいしの共存が先決ですな。

叫びたい言葉！

今月の提言者

大野 ひろ子さん(南市岡)



「生活保護法改悪」

生活保護法改悪、社会保障解体も

生活保護制度を骨抜きするためにセットで上程されていた「生活保護法改悪案」と「生活困窮者自立支援法案」が十一月八日の衆院本会議で、自公と民主などの賛成多数で可決・成立しました。今の生活保護法が施行された一九五〇年以

来的大幅改悪です。どんな内容でしょうか。

◆罰金の引き上げ

まず「生活保護法改悪」の内容は、①生活保護費の不正受給の罰金を今の「三〇万円以下」から「百万円以下」に引き上げる②受給手続きも見直す③申請者に扶養義務のある家族がいて、扶養可能とみられるのに応じない場合、自治体
が家族に説明を求められるようにする―等です。

◆「養老や介護」に口を閉ざす批判

これではなるのしょう。

今も「家族や親類に知られたくない、迷惑をかけたくない」一点で生活保護を申請せず野宿生活を送っている人も多く、餓死に追い込まれる人も後を絶ちません。その上での扶養義務の
照会強化は、困窮者本人をますます縛り苦めます。のみならず家族も追い込まれます。

ほとんどの人が自分の生活だけでアップアップ。「扶養義務」なんて言われたら、家族間に亀裂と対立を生み、犯罪さえ誘発しかねません。
一百万を超える受給者と予備軍、その親類縁者をきめたらどれほどになるでしょう。まさに私
の問題、あなたの問題です。

おまけにこの間、「不正受給」が蔓延しているかのよう
に印象付けるキャンペーン。しかし実際はわずか。警察と行政が連携して「不正」
をでっち上げ、改悪に反対する闘いを弾圧して
いる、というのが実態です。

日本弁護士連合会は同日、「保護申請を委縮
させる効果を及ぼし、重大な問題がある。成立
は遺憾」と批判する声明を出しました。

◆「支援」「重役」の二重構造

一方の「自立支援法」の内容は、①生活保護
に至る手前の支援に重点を置く②生活に困る人
から幅広く相談を受ける窓口を自治体が設置す
る③自立に向けた計画を本人と話し合って自治
体が作成する―等と報じられています。

◆仕事作りが行政の責任

これはどうしてのことでしょうか。保護に至る
手前で支援する窓口―聞こえはいいですが、健
康な若者でも安定した仕事に就けない社会です。
大企業や投資家が大儲けし、雇用責任は決して
とらない。政府は労働法制を改悪し、労働運動
を弾圧し、非正規雇用や失業、貧困や病气、労
災や家族崩壊を増大させてきました。ほとんど

の人が最後の命綱として役所の門を叩いているのです。そんな中での「相談窓口」は実質「追い払い窓口」となる、否^{いな}するのためのものです。そこではなく、困窮者に見合った仕事を作るように、行政の最低限の義務・責任ではないでしょうか。

◆社会保障解体プログラム

加えて、消費税増税法とセットで打ち出された「社会保障改革」があります。自公政権は同月五日、その手順を示す「持続可能な社会保障制度の確立を図るための改革の推進に関するプログラム法」(プログラム法)なる法律も成立させました。民主は棄権、他の野党は大半が反対。これに基づいて今年から個別の法案を提出し、医療費負担増や介護保険改悪などを議論^{もんろん}んでいます。要は社会保障解体プログラムです。

◆社会保障は《権利》

社会保障は憲法でも保障された人間としての基本的権利です。戦後憲法と先人たちの闘いによって勝ち取られてきたこの原理を転覆し、否定する——この間の動きの根本的な問題、攻撃の本質はここにあります。その突破口が「生活

保護改悪」なのです。

人間としての尊厳と生存権、連帯と共生をがけて社会保障解体と闘いましょう！

〈港〉同南友会支部 ☎六五八二・四八五〇

あれこれガイド

●緑の地球ネットワーク(GEN) 中国^{さんせい}山西省

大同市^{たいとうし}の黄土高原^{じゅうど}で一九九一年から緑化協力を続ける認定特定非営利活動法人。地球環境のため国境を越えて力を合わせている。Ⅱ写真(下)のうちはイメージⅡ黄土高原フーキングツアー

Ⅱ黄土高原を訪問し、緑化協力の成果を観察し、村人と交流し、失われた緑を取り戻す試みを体験。四月五日(土)〜十一日(金)。費用は一般一七六〇〇円他(学生は二万円割引)。定員三十人程度Ⅱ講演『ポスト改革開放』時代の中国Ⅱ習近平・李強強政権はどつ動くⅡ高度成長のひずみが顕在化してきた中国の今後を展望。二月二十八日(水)十八時半〜二十時半。大阪市立総合生涯学習センター(大阪駅前第一ビル五階)第一研修室で。講師は加藤千洋さん(同志社大学大学院教授、元朝日新聞編集委員)。参加費は七

百円(学生二百円)Ⅱ詳細はGENの事務所(市岡一・四・一四・五階 ☎六五七六・六一八一 FAX六五七六・六一八一 Eメール gentree@s4.dion.ne.jp)へ。



●日本クリニック協会 入院生活を送る子どもたちの病室を定期的に訪問し、遊びとユーモアを届け、子供たちの笑顔を育む道化師「クリニックラウン」の活動を普及・推進する特定非営利活動法人。一〇〇五年から港区を拠点に全国で活動Ⅱ写真(右の下)は活動イメージⅡ臨床道化師フォーラム〜子ども理解のカンファレンス〜

Ⅱ中西直子さん(西宮市など医療福祉センター放課後等デイサービス通所)つばさ「看護師長が「重症心身障害の子どもたちに寄り添う看護」と題して講演。他にクリニックラウンの概要説明

や事例報告など。二月十八日(日)十三時十八時
大阪府赤十字血液センター(城東区森之宮二、
四・四三七階会議室)で。参加費は一般 千円、
学生千五百円(いずれも資料代込み)。定員八十
名▽詳細や申込は同協会(築港二・七・一五港
振興ビル305A TEL・FAX:六五七五・
五五九一 Eメール:info@ci-ni-
c-owns.jp http://www.ci-
n-ic-owns.jp)へ。

●**校道体験講習会** 校道じやうだち(27頁に記事)への
関心に応じて各地で開かれている講習会の一つ。
三月二十一日(金)十三時十八時に森ノ宮医療専
門学校(東成区中本四・一・八)アネックス校舎
柔道場で。大阪で二回目。対象は校道未経験者
(武道・スポーツの経験がなくても可、前回受講
者可)。費用は無料。定員は二十名。申込は公益
社団法人大阪府剣道連盟登録団体・関西校道連
盟事務局(T581・0037 八尾市太田六・
一四六 近藤眞佐雄方 ☎〇八〇・四三九八・二
〇八八、Eメール:kansai.judo.o.j-
i-mukkyoku@sea-i.co.jp)まで。
●**ムチ打ち(首・腰) 無料相談会** 交通事故で

ムチ打ちになった被害者を対象とした無料相談
会。二月二十二日(日)十時十八時に行政書士
のむら事務所(築港二・七・一六〇〇)で。
一人約一時間。事前予約制(電話かEメールで)。
「どうしたら正しい補償が得られるかをアドバ
イスします」「事故後、早めの相談が良い結果に
つながります」(同事務所・野村光恵さん)。E
メール:info@jikkou110-nomura.com、TEL:六五七六・六〇七六、F
AX:六五七六・六〇七九。

●**お募参り写真コンテスト「フォトコン2014」**
「笑顔でお募参り」「先祖様に報告」「尊く
合掌している姿」など「幸せのシンボル」とし
てのお募やお募参りを撮った写真(プリントで
もデータでも可)を募集。八百字までのメッセー
ジ(手書きでもデータでも可)を付けければなお歡
迎。「お募100年プロジェクト」加盟石材店へ
持参又は郵送。賞金は大賞(一名五万円、審査
員特別賞(二名二万円、庵治あんじストーンフェア賞
(一名二万円)、奨励賞(二名の記念品。応募受け
付けは二月一日(土)～五月二十四日(土)。審査
発表は六月二十八日(土)ホームページで。詳し

くは主催の「お募100年プロジェクト」のホ
ムページ(http://ohaka100nne
n.blog.fc2.com/)で(受付も可)。

●**石綿(アスベスト)パンフ** 肺がん、中皮腫ちゅうひしゅな
どの病気や、息切れ、胸の苦しさなどの症状や、
それらによる死に「アスベスト(石綿)によ
るものだ」と認められたら、色々な給付を受け
ることができる。このパンフレットは、そんな
人たちが家族のために、①石綿による病気には
どんなものがあるか②石綿による病気と分かっ
た場合の補償や救済の制度にはどんなものがある
か③その場合にどこへ問い合わせたらよいか
―などを厚生労働省と環境省と独立行政法人環
境再生保全機構(ERCA)がまとめたもの。
タイトルは『その病気、その症状は石綿(アス
ベスト)が原因かもしれません』。「コンパクト
で分かりやすい」「区内六十代男性」と好評。港
区で暮らすか働いている人なら港区役所(同庁
舎(市岡一・一五・一五)三階の港区保健福祉
センターのチラシスタンドに設置してあるもの
を無料でもらえる。

戦争世代のぼやき

池島一・勝部泰臣 80歳
（かつへやすおみ）

言ったらナンやけど、政治家、財界人、メディアの人も含め、日本人はアホに近づいてるんじゃないかと思う。戦中・戦後、苦労しやした人は「ハンコ」といって差別用語にめげず頑張ったという。同年代であるだけに、私はこういう老人の味方であり同志である。しかし同志は少なくなった。

先日、居酒屋で若いネエちゃんになア、席談つてもうたつて半泣きの親父がいた。気持ち分かるで。今、電車の中、全員スマホに夢中やもんね。昔なら当たり前のことやった。なんぼ時代が変わった言つても、人として当たり前のことにすつて気持ち出る人が少ない。戦争を知らんてこんなにも違ふもんか。

私ももうそれほど長ないから言いたいこと言いますけど、隣（韓）もその隣（中）も同盟国もEUも眉（まゆ）をかめるやつなとばかりして『保守派』とか言われてる人ら、先々のことを考えて物言（ものごと）つてくたなはなは、また昔に戻りませー。

土地の又貸し・不法拡張、何とかならぬか

市岡・70代M

地域の環境問題に関心があがり、港区内でも色々と問題があることに気づき、その中で関係する官公署などに改善を求めました。その中で随分前から気になっていた問題に区内の河川の堤防付近の土地の又貸し及び不法拡張があります。そこは大阪市港湾局の所有地で、それが二十年以上も区内の民間企業に賃貸され（これ自体は問題ありませんが）、それをその企業が他社に又貸しし、おまけに堤防の外側を勝手に埋め立てて土地を不法に拡張し、その分まで他者に賃貸して利益を得ているのです。明らかに法律（刑法 三五条第二項）他人の不動産を侵奪（せんさく）した者は十年以下の懲役に処するに違反し、賃貸契約違反でもあり、何より人として、企業としての信義にもとる行為です。管轄する官公署（港湾局・警察署）の黙認・放置の姿勢、地域から選出された議員の無関心・不迫及の姿勢を引き続き問いたいと思っておりますが、読者の皆さんはいかがお考えでしょうか。

嬉しかった「技能五輪金メダル」

築港・70代H

毎月楽しく購読しています。今月は「技能五輪で金メダル！ 築港『むろろ』の仲間（なか）がわかすま」(前頁)が「一番嬉しい記事でした。」「なにわの名工若菜賞」の葛尾さん(十二頁)に続く「割烹（かっぽう）びるる」の連続快挙についてですが、よく知っているお店なので、よけい嬉しく受け止めました。港区の誇りであると同時に、大阪の料理界でも初ということ、大阪にとっても大変誇りある出来事だと思います。記事の中では、特に、前年の技能五輪で銀メダルだったことに満足せず、その時の不十分さを猛練習で克服して再挑戦し、見事最高の栄誉に輝いたことが素晴らしく思いました。そして、三十五歳以上の全国大会を目標にさらに技術を磨き、「技術と共に知識も兼ね備えた、バランスのとれた料理人になり、世界に誇れる日本料理の素晴らしさを広く伝えていけたら」と将来像をしっかりと描いておられることにも感心しました。弱冠 二十二歳の青年をいっままで育て上げられた

お店の指導にも敬服です。今後はピーシィヤーもめるかと思いますが、それに負けず、せうに高い所を目指してほしいと期待しています。

地活協の活動よく分かったが、注文も

（区内・60代男性）

地域活動に関わっているので「地活協」のような活動した『まちづくりフォーラム』で検証（前11頁）「目が留まりました。（この催しには私も参加しましたが、かなりの内容にもかかわらず、よくポイントをまとめられていると感心しました。ただ、見出しに「検証」とあるわりに、」地活協で地域活動が活発になった「地活協だから」といふようなこともあったといういは、地活協のメリットばかりが強調され、この新しい地域組織が本来に地域の活性化にプラスになっているのかという点について検証的な視点が、催しの中でも、また記事そのものにも見られなかったように思います。最後の参加者の女性の「コメントも、その点には触れられていません。（このフォーラムの趣旨からはなつたてまつるのようだが、地域新聞として、その辺

↑辻悦子さん（市岡元町）からの絵手紙



を鋭く突いた視点も欲しかったなあと、少し残念に思った次第です。個人的には、このフォーラムで報告された内容はみな地活協でなくとも出来ることだし、これまでにもやれてきたものであり、地活協は必ずしもプラスになっているとい、むしろ地域活動を財政的にも内容的にも窮屈にさせるものだ（とはいっても以前の活動形態が全て良かったとも思っていないませんが）と感じるのと、よけいなように思いました。

編集部から 直撃的な意見に心より感謝致します。11頁の「検証」という見出し（本文中にも同じ言葉がありますが）は、この催しの趣旨からも、また記事の内容からしても、そんわ

なかったと思います。「この催しがどういふもの、つまり地活協の長所・短所や、地活協によるメリット・デメリットなどを確かめるもの」とあつてほしい、またそうあるべきだとの期待感から出た表現だったと振り返っています。今後とも、より正確な記事及び見出しの作成に努める所存ですので、読者諸兄の鋭い読み込みと問題提起を引き続きお願いするものとします。

温かかった成宮さん「百歳祝い」の記事

（綾・70代女性）

いつも楽しく購読しています。今月は「百歳祝い」について、成宮さんに首相と区長から記念品（前16頁）が心に温かく残りました。沖縄から横浜に出て女子として働き、沖縄戦から子供を守り、戦後も大火や水害を乗り越えて生き抜いていられたように人間としての強さ、逞しさを感ずきました。いつも明るく性格よく大好きな『ていんさくぶぬ花』を耳にするのがチャシーを踊り出すのが。最後に書かれてあったように、数子さんの心の中には、いつも真っ赤なていんさくぶの花が咲いているのでしようか。

イベントも大切ですが、こんな昔のちょっとした出来事でも、こんな風に取り上げてもらうことも素敵に感じられます。「これからできるだけ、小さくても明るい記事を書いて頂けたらと希望します。」

元気な高齢者、こんな風に過ごしたい

田中・50代女性

ネットで毎月読んでいます。「別配布されていた頃から読んでいますが、広告が少なく、地域の出来事を知らせる記事がたくさんあるのが、地域新聞として当たり前といえるは当たり前だけれど、素晴らしいと思います。今月は高齢者の記事が目立ちましたが、特に「カフェオレ」(前号28頁)と「教室合同発表会」(同30頁)が楽しく読めました。歌ったり踊ったりされている方の表情が生き生きしていて、本当に心から老後を楽しんでおられる様子が伝わってきました。知っている方の写真も何枚か載っていて、よけい親しみが湧きました。自分も年を取ったらこんな風に過ごしたいと思った次第です。それから技能五輪で金メダルを取った若者の記事(前号

1頁)もあれば、このような元気な高齢者の記事もあって、バランスがとれていると思いました。

引き揚げ体験に「苦労さまー」

三光・60代女性

猪伏昌三様の「戦争体験」を欠かさず読んでいます。今号(前号33頁)は、引き揚げが始ま



→尾崎キヌ子さん(池島)からの絵手紙

とてもなお続いた苦難の様子がとてもリアルに語られていて、読みながら「本当に『苦労さまでしたー』と心の中で叫んでいました。鉄橋が爆破されたり、原野の真ん中で機関士から金を要求されたり、線路で荷物を引っ掛けられたり、船に乗ってから死者が出たり……。もし今の私たちが同じ目に遭ったら、きっと途中でへばっていただろうと思います。それでも耐え抜けたのは、やはり日本人として懐かしい故国の土を踏みたいという一心、そして、それまでに培われた強い精神力があったからでしょう。本当に毎号感動を与えて頂き、感謝で一杯です。」

住まいの防犯レベル高めよう

- ① ワンドア・ツーロックは常識
- ② ピッキングに強いカギに交換
- ③ 窓にも補助錠の取り付けを

PHS・携帯OK ☎ 0120-70-5569

(ア) 港カギ防犯センター

安全・安心をご提供します

港区港晴1-4-8 (港晴小学校並び)

港カギ防犯センター

☆大阪府錠前技術者防犯協力会会員
☆港防犯協会会員 ☆防犯設備士第00-6738号

身挺し石綿禍に警鐘

真下健二さんの遺骨 大阪湾に



→ 身を挺して石綿禍に警鐘を発した真下健二さんの遺骨を大阪湾に撒く弟・広生さん（向こう側）と知人の助野令子さん 11月26日午後

身を挺して石綿（アスベスト）被害に警鐘を
発した真下健二さん、安らかに。港灣荷役で
石綿を吸引したことが原因で中皮腫（肺を囲む
胸膜や臓器を囲む腹膜など）にできる悪性の
腫瘍を発症し、二〇一一年一月に七十一歳で
亡くなった元港灣労働者、生前田中在住の遺
骨が二月二十八日、大阪湾に散骨されました。
病症解明や治療法確立のため本人の希望で提供
（献体）されていた遺体の解剖が終わったこと
を受け、「労働の場だった大阪湾の海に眠らせて
やりたい」との親族の意向で実施したものの、

◆ 献体から返還され海洋に散骨

前日の二十五日には献体先である大阪市立大
学医学部で「御遺骨返還ならびに感謝状贈
呈式」が行なわれ、健二さんの弟・広生さん（埼
玉県在住、六七歳）が出席。「解剖が無事終了し、
医学教育・研究に多大な貢献となった」（ことへ
の感謝を表明され、遺骨を受け取りました。（記
事末に返還・贈呈式の概要※1）

二十八日にはその遺骨を携えた広生さんが、
生前の健二さんと家族ぐるみで親交のあった
助野令子さんや本紙記者と共に専用船に乗り

← 身を挺して石綿禍に警鐘を発した真下健二さん（写真は中皮腫発症以前と思われる十年ほど前に八幡屋公園の小山の上で） 11親族提供



込み、洋上で「散骨式」を挙行。お酒や花と共に
遺骨が大阪湾洋上に撒かれました。（記事末に散
骨式の概要※2）

◆ 〇八年秋に自覚症状

真下健二さんは一九六〇年ごろから大阪湾で
港灣荷役に携わり、九九年に退職。その三十
数年間のうち二十年以上は石綿を扱ったとい
います。六十九歳になった二〇〇八年秋、階段を
上ったり、深呼吸したり、くしゃみをしたりす
ることが、胸の痛みで出来なくなるといって自覚

症状が現われました。

そこで大阪市の肺がん検診・結核健診を何度か受けましたが、「何ともない」と言われたので港区内の病院でも診てもらいました。担当医に「アスベストによる症状では」と不安を伝え、しばらく様子を見るようにになりました。

◆手術で腫瘍を切除

しかし翌〇九年八月にはますます痛みがひどくなり、「詳しく調べてほしい」と担当医に催促。その紹介で別の医療機関へ出向き、PET検査（分裂の早いがん細胞がブドウ糖を多く消費する性質を利用してがんの有無や性質を診断する検査）、次いで生体サンプル検査を受け、「胸膜悪性中皮腫」と判明しました。すぐさま入院して手術を行ない、左肺を囲む胸膜にできた三つの腫瘍のうち最も大きな二つを切除しました。

◆実態話し労災が適用

退院後の七月、健二さんは労災認定を求めて大阪西労働基準監督署（西区）へ出向きました。その際、本紙第八九、九八号（大阪港での港湾労働者のアスベスト禍を一面に掲載）を持参。担当者に「これをお読みください。この通り

の労働をしてきたんや」などと話しました。

その後、労基署はそれらの記事に名前が出ていた元港湾労働者の田中章夫さん（七〇）（田中在住）からも事情聴取を実施。田中さんは、健二



→石綿輸入のピークだった一九七〇年代の荷役風景。手鉤を使う作業で飛散した石綿粉を真下健二さんから港湾労働者が多量に吸い込んだ

さんと一緒に働いていたことや港湾労働の実態を話し、健二さんへの労災適用を求めました。

一週間後、「労災適用」の連絡が入りました。健二さんは「これまでの治療費は全額返ってくる」「これからの治療費や生活費も支給される」と胸をなで下ろし、証言してくれた田中さんに感謝しました。

そして府内の労災指定病院に入院し、残る二カ所の中皮腫への抗がん剤治療を続け、十一月に退院。二〇一〇年一月からは治療案による在宅での抗がん剤治療（点滴）に移りました。

◆港湾仲間を気づかう

同年三月には本紙の取材に応じ、①症状に改善は見られず、疑似麻薬（痛みを和らげるための薬を飲んでも常に胸の痛みや息切れがあり、膝裏の痛みや血圧上昇、疲労感、食欲不振、それに治療による副作用と思われる顔の火照りなどがある）②担当医からは「治療薬であるだけに効果は未知数」と言われており、自分でも、改善というよりどれだけ悪化を食い止められるかだと受け止めている③介護保険による生活介助を受けているが、港湾仲間らの励ましが嬉し

い④労災適用は日雇いでは(西労基署管内で初めてかもしれないが、自分の例を見て続いてほしい。まだ多くの仲間が不安を抱えたり泣き寝入りしたりしているかと思うと落ち着かない

⑤大阪市の肺がん検診や結核健診を継続的に受けることはもちろん大切だが、それだけでは見過ごされる恐れがあるので、自覚症状があってもなくても医者には継続的にかかり、その紹介で、最新の検査法であるPET検査を受けるのがよい。いきなり自費で受けると十万円もかかるから—などと語っていました。

◆一時は小康状態も

その後、同年八月十三日には本紙の電話取材に、二週間に二回のアムリタ(抗がん剤)投与を続け、このほど四回目が済んだ。投与後十日間は副作用があるので入院し、そのあと自宅に帰るといつ繰り返した。食べ物に味が感じられないのが辛い。初めは抗がん剤で毛が抜けたが、今は抜けないようになった」とコメント。

同年八月二十五日にも本紙からの電話に「明日アムリタを打ちに行くが、少し状態が良くなり、アムリタ投与後の入院はしていない。毛も

抜けていない。食欲も少しあるようになったが、やはり味はない。ひどく暑い、クーラーは体に悪いのでつけていない」などと語り、小康状態が続いていることを示唆していました。

◆強烈な痛みを苦む

ところがその後、徐々に容態が悪化し、抗がん剤や疑似麻薬の効果も薄れ、九月頃からは入院期間も次第に長くなり、同年十二月下旬には完全に入院。食欲はなくなり、心臓の周りには水が溜まり、便には血液が混じり、胸部や背中を中心とした全身の強烈な痛みのにのたうち回る日々が続きました。そして翌二〇一一年一月十四日午後、本人からの連絡を受けて訪れた弟(広生さん)が病室に入ると、痛みはいよいよ激しくなり、その日の夕方五時三十五分、息を引き取りました。最後は医師が弟に了解を得て鎮静剤を打ち、痛みを和らげる措置を執ったため、「死に顔は安らか」(広生さん)でした。

因みに、前年九月八日にはやはり長年(回つて石綿粉を吸い続けた元造船労働者・中田鉄夫さん(生前)八幡屋在住)本紙二〇一〇年八月号十一月号の記事)が中皮腫との闘病の末に亡く

「港区のもう一人の石綿犠牲者、中田鉄夫さんが働いていた造船所での石綿使用例。上は機関室内のボイラー作業(炉内や外周には石綿製品が吹き付け張り付け・塗り付けなどの形で用いられていた、下は機関室での配管取り付け作業(この作業の後、配管には断熱材として石綿保温材を巻きつけることがあった)



なっており、この二人の死は、港区でも石綿による被害が「死」という最悪の形をとって顕在化してきたことを明らかにしました。また一人に共通するのは、自覚症状が現われてから三年余りで亡くなったことでした。

◆兄の死が警告になれば

健さんの弟・広生さんは、散骨式を終えて次のように語っていました。

「兄は東京都杉並区に生まれ、少年時代は広

はつかい

島根大野村（現江津市）で育ちました。五歳の時に原爆の強烈な光と音で「フツ」と泣き出したことがあったと親から聞いています。広島工業高校を卒業し、東京都町田市や埼玉県で少し働いた後、家族と離れて大阪へ出港労働に就きました。瀬戸内海育ちの兄は無類の海好きで、大阪へ出てからも釣りやスキューバダイビングを楽しんでいたようです。特にダイビングでは『同年輩の誰にも負けない』と自信を持っていました。この大阪滞りには仕事だけでなく、そんな遊びでも来ていたと思います。献体については何年も前から本人が希望していました。今回、解剖が無事終わったことで、体はボロボロでも、病症の解明や治療法の確立という面で少しは貢献できたかと思っています。また港新聞には闘病から死に至るまで、折に触れて経過を掲載して頂きましたが、今回も献体や散骨の模様を掲載して頂くことで、石綿禍に不安を持つ人たちの注意を喚起し、行政による救済措置を促すように心がけたいと期待しています。

◆ただ安らかに願う

同じく散骨式に参加した助野吉孝さん（田中

在住、七八歳）は次のように語っていました。

「お互い近所に住んでいた関係で、三十年ほど前に家族ぐるみで親しくなりました。健康のためによく公園などを散歩されているのを見かけましたが、四年ほど前から『胸がチクチク痛む』と訴えるようになり、その度に『今日』は五。ちよつとまじや』『今日』は八。たまつた』などとノートに記しておられたのを覚えています。週に何度か様子を見に行ったり、病院に付いて行ってあげたりしましたが、だんだん状態はひどくなっていきました。初めは原因が分からず、本人も私たちも普通の病気だとはかり思っていました。石綿が原因だということが分かった時には遅かったようです。石綿を外国では使わなくなったのに日本では長く使われていたことでこういう犠牲が生まれ、とても残念です。何も知らない健さんらは『仕事中に石綿の入った袋を枕に肩覆したこともある』と言っておられました。今日は大好きだったお酒やお花と一緒に散骨することができて良かったです。あとはただ安らかに願っています」。

◆死んでも献体は立派

また生前の健さんを知る元港労働仲間・田中

章夫さん（前出）は次のように話していました。

「私もナベさん（健）さんの愛称と同じ頃に長い間、港灣で石綿荷役に携わりましたが、船内は石綿粉で白く霧がかかったような状態で、隅に置かれた水桶の表面には石綿の粉が浮いていました。その後の検診で私の左肺にも影が見つかり、精密検査では『肺気腫』と診断され、喉の枯れもあるので、中皮腫や肺がんがいつ発症するか、とても不安です。当時、大阪港で働いた者はみな『定年』になって、年金ももらわなまま死んでいくんや』と言い合っていました。我々は労働運動の中で大阪港の職安に『俺たちが死ぬまで港灣での就業記録は消すな』と釘を刺してきましたが、ナベさんはその記録が石綿荷役の証明になって労災を適用されました。が、それから一年半と経たないうちに亡くなりました。死んでしまつては労災も一体何になるのかと虚しい気持ちです。（欧米では石綿を早くから規制していたのに、有用だからと輸入し続けた）国の責任は非常に大きい。安全対策を執りなかつた企業にも責任はありますが、国が全面

的にバックアップしない限り、被害者への充分な被害補償や生活保障はできないでしょう。私の知る限りでは、石綿は神戸港よりも大阪港に多く回って来ました。そんなこともあって、港区には潜在患者がまだたくさんいるし、『結核』なと言われて何も分らないまま亡くなった者もいます。そんな中で、自分の体は死んでも、献体という形で世に警告を発し、医学の進歩に貢献したナベさんの姿勢はとても立派だと思います。

◆国はいつか対策を

また健一さんが生前よく飲みに行っていたという大澤酒店(築港)の大澤清美さん(六七)は次のように話していました。

「一緒に旅行するなど四十年以上の付き合いでしたが、みんなから『ナベさん、ナベさん』と呼ばれ、この辺で知らない人はいませんでした。普段は真面目でしたが、飲むといつも面白い人で、人懐っこい情にもろいところもありました。最後に店に顔を出したのは二〇一〇年の夏、確か夜の九時頃でした。生前よく、『俺が死んだら献体に出してもらおうなや』と言っていた

ましたし、労災が認定された時も、『ほかの者が続いてくれたら』と言っていました。自分のことだけでなく、一緒に働いた仲間のことがとても気になっていたようです。そんな人たちのためにも、国は真下さんの死を無駄にせず、しっかり対策を講じてほしいと思います。」

◆数年～数十年後に発症

屈強な港湾労働者・真下健一さんを死に至らせた石綿。それは柔軟性や耐食性に優れた「奇跡の鉱物」として一九〇〇年頃から工業材料に使われ、日本では七〇年代半ばにピークを迎えました。健康被害が社会問題となって生産使用規制が行なわれ、世界的には八〇年代から生産が減少しましたが、日本では引き続き大量に輸入され、九〇年代によつて減少に転じました。

輸入の大半は船積みで、それゆえ、国内でまず危険に曝されたのは港湾労働者でした。荷役には袋を肩で担いだり、手でつかんだり、手鉤で引っかけたりといった肉体力労働が必要で、袋が破れることも多く、穴から飛散した石綿粉を労働者は大量に吸い込みました。

吸引による症状には、①石綿肺（石綿粉が肺

に沈着し、段々と肺機能が低下する）②肺がん（石綿粉が細胞の遺伝子を刺激し、肺がんを発生させる）③悪性中皮腫（前出）などがありますが、それらが現われるのは数年～数十年後です。ですから潜在的に病気を抱える人が今も多くいることは明らかです。

◆対策は石綿新法や労災

こうした歴史の中、大阪港を抱える港区には石綿関連の仕事に関わっていた人たちがまだまだいるはずですが、そんな人たちの発症不安や生活不安に応える施策にはどんなものがあるのでしょうか。

一つは、国が二〇〇六年三月から施行した「石綿による健康被害の救済に関する法律」(石綿新法)。病気や死亡の原因が石綿だと認められれば本人や家族や遺族に医療費や療養手当、弔慰金や葬祭料が支給されます。

もう一つは真下さんのような労災による治療費や生活費の補償。石綿関連の労働者であった人やその遺族に適用されます。

また国は二〇〇七年十月から、石綿作業に従事していた労働者が退職後に受けられる無料の

健康診断の対象を拡げ、症状がなくても職歴だけで「健康管理手帳」を交付し、それで定期健診を受けられるようにしました。

◆まず保健福祉センターへ

こうした中で大阪市では「アスベスト対策基本方針」に基づいて各区保健福祉センターに相談窓口を設置したり、肺がん検診・結核健診Ⅱ表紙にお知らせⅡを実施したりしています。

ですから、発症不安や生活不安を持つ人にとってはまず、身近な相談機関として各区保健福祉センターの相談窓口へ向かうことが、行動の第一歩といえるでしょう。そして、労働者であった人の場合は、真下健二さんのように労働基準監督署へ相談することも重要です。さらに中田鉄夫さんと家族のようにつ、国や企業の責任を問い、賠償を求めて裁判に訴えるという手段もあります。

◆さらに関心と行動を

現在、国内の石綿関連患者は数十万人と推定され、例えば泉南地方の元工場労働者や周辺住民らによる集団訴訟では、二〇一〇年五月には大阪地裁が、二三年十一月には大阪高裁が、い

ずれも「石綿被害は国に責任がある。賠償しない」との判決を下しました（その後、国と原告が共に上告）。また神戸港で石綿運搬に携わり、中皮腫で死亡した男性の遺族が、勤務先だった三井倉庫に損害賠償を求めた訴訟では昨年十一月、最高裁が賠償命令を確定させました。

また石綿などの積み荷を神戸港でチェックしていた男性が肺がん^{（注）}で死亡したのは石綿が原因だとして男性の妻が労災認定を求めている訴訟でも昨年十一月、神戸東労基署が労災を認めました。さらに沖縄県内の在日米軍基地で勤務中に石綿を吸い込んで病気になる、国から労災などの認定を受けた日本人が二十八人^{（注）}に上り、うち二十一人は既に死亡したことが、今年になって厚労省のデータで明らかになりました。

港区内でも石綿による被害がいよいよ顕在化しています。真下さんや中田さんの死を機に、港区民、とりわけ石綿関連の労働者や家族の間でこの問題への関心が一層深まり、①発症までの健康診断②発症後の治療③過去からの医療費や生活費の補償④将来の生活保障―などに向けて行動に踏み出すことが期待されます。〈8頁

「あれこれガイド」に石綿ハンフレッットの紹介
.....

※1 御遺骨返還ならびに感謝状贈呈式

一月二十五日午後二時、大阪市立大学医学部学舎（阿倍野区）大講義室で、四十一組の遺族（百人超）や教員、学生ら関係者、合わせて約二百人が参加して行なわれた。直近の約一年間に解剖実習に遺体を供した故人と遺族に対して毎年この時期に催される行事。同大学とみおつくし会（同大学に献体を志す人たちの集まり）が主催。

まず「医学発展に捧げられた尊^{（みたま）}い御霊^{（みたま）}に対して」黙祷。荒川哲男（大阪市立大学大学院医学研究科長医学部長）が「尊^{（みたま）}い遺志を示された」本人と「理解を示された」遺族に心から感謝。解剖実習は医学の発展に資するだけでなく生命の尊厳を学ぶ貴重な機会。今後社会に貢献できる医師の養成を決意している」とあいさつ。

続いて中尾田美（学生代表）が「昨年九〜十月の実習では医学の知識を学ぶだけでなく生命に関する倫理をも考えることができた。実習の前は不安で一杯だったが、遺体を前にして、この遺志を裏切らないよう決意を新たにしたい。」遺

体からは、それまでに学んだ知識とのリンクを確認できることもあれば、食い違いを発見することもあった。病気の遺体からは闘病の苦しみや辛さが思われ、身が引き締まった。また班単位の行動の中で、協力することや自己の役割を果たすことの大切さを学び、精神的にも成長できた。この経験を忘れることなく、さらに勉学に励み、病める人たちの助けになることで社会貢献を誓つ」とお礼の言葉を述べた。

このあと各遺族に遺骨が返還されると共に感謝状が贈呈された（故人に対しては下村文部科学大臣から、遺族に対しては荒川部長から。最



→ 健二さんの遺骨を大阪市大医学部の学生から返還される広生さん①と、健二さんの好物だったお酒を海に捧げる広生さんと助野さん②

さかみちお
後に坂道天・みおつくし会理事長が「日本の献体

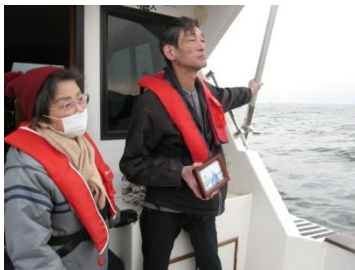
制度は世界に冠たる仕組み。明治以来、遺体は個人的に確保されてきたが、戦後、医学界を挙げた働きかけで昭和五十八年、献体に関する法律ができた。外国にも同様の制度はあるが、日本はと厳粛な形で行なわれている国はない。今後とも成願者の崇高な志を損なわぬよう、この制度が維持され、日本の医学が持続的に発展することを願つ」とあいさつ、閉会した。

なお、同大学への献体に対する問い合わせはみおつくし会阿倍野区旭町一・四・三 大阪市立大学大学院医学研究科内 ☎六六四五・三七八〇）まで。

※2 真下健さん「散骨式」 故真下健さんの弟 真下広生さんが海洋散骨業者（堺市の株式会社イセモ）に依頼し、健さんの生前の知人・助野孝子さんと本紙記者も参加して二月二十六日（日）に実施。午後二時二十分、チャーターした船約十トに計八人（当事者二人と添乗員二人と船長が乗り込み、救命胴衣を着けて堺港を出航。風速十メートル、波高一・五メートル、強風波浪注意報も出る不安定な曇りの空の下、時速十数キロ（通常は二

十数キロだが安全を期して）で走った。防波堤を抜けると波がさらに高くなった。一時五十分ごろ、港から三つ四つ沖合、水深約十八メートルの大阪湾洋上でエンジン停止。デッキへ出た。大阪、神戸、淡路島、徳島、和歌山などの各陸地が見渡せ、強風に船体が揺れる中、健さんが生前好んだお酒を流し、次いで、前日返還された遺骨（業者が破碎して白粉になったもの）を散布、さらに花を捧げて合掌・黙祷。このあと船は散骨点を何度か周回し、汽笛と共に最後の別れを惜しんだ。一時四十分帰港。なお遺骨の半分は二月三十日、八王子市の「産業殉職者霊堂」に納められた。

← 散骨式での献花風景①と、遺影を手に遺骨との別れを惜しむ広生さんと助野さん②



十数キロだが安全を期して）で走った。防波堤を抜けると波がさらに高くなった。一時五十分ごろ、港から三つ四つ沖合、水深約十八メートルの大阪湾洋上でエンジン停止。デッキへ出た。大阪、神戸、淡路島、徳島、和歌山などの各陸地が見渡せ、強風に船体が揺れる中、健さんが生前好んだお酒を流し、次いで、前日返還された遺骨（業者が破碎して白粉になったもの）を散布、さらに花を捧げて合掌・黙祷。このあと船は散骨点を何度か周回し、汽笛と共に最後の別れを惜しんだ。一時四十分帰港。なお遺骨の半分は二月三十日、八王子市の「産業殉職者霊堂」に納められた。

若い力を世のために！

港区で703人が新成人に



→この溢れるエネルギーを世のため人のため
にと願う11月13日、弁天町オーク広場で

(写真は港中学校卒業生のグループ)

無限の可能性を秘めた港区の若い力が一堂に
会し、決意も新たにそれぞれの飛翔を始めまし
た。「成人の日」の二月十三日、港区では七〇
三人(男三五六・女二四七)人、昨年より三五人
減が新たに成人となりました。このうち五一九
人(男二六九・女五〇)人がホテル大阪ベイ
タワー(弁天)で催された「港区成人の日 記念の
つどい」(港区役所などから成る実行委主催)に
参加し、新たな門出を祝福されました。

午前十時からの「記念式典」では橋下徹大
阪市長が「一生懸命動けば必ず誰かが助けてく
れる」、武智虎義・大阪市「コミュニティ協会港区
支部協議会会長が「厳しい環境の中でも高い志
を持って」、田端尚伸・港区長が「空襲や台風に
よる壊滅状態から復興してきた港区のさらなる
発展へ力を」、奥野正美・大阪府会議員が「馬の
ように遠くを見つめる目と目標へ走り続ける馬
力」とそれぞれ祝辞。新成人を代表して古井
快昌さんと堀之内沙恵さん(共に港晴小学校下
が「紛争や貧困、地球規模の環境破壊などの中、
世界中の人々が幸福に暮らせる社会」にするため
人類の歴史と英知をさらに発展させ、後世にリ

←519人の新成人が参加した「港区成人の日
記念のつどい」。上は新成人代表への花束贈呈
下は「成人のことば」を述べる古井快昌さん
(右)と堀之内沙恵さん(左)(共に港晴小学校下)



レーする責務がある。グローバル社会の一員と
して、相違を容れ、障壁や失敗も真摯に受け
止め、周囲と協力して解決に立ち向かう大人に
なりたい。港区で育った誇りを忘れず歩んでい
く(要旨)と『成人のことば』を述べました。
なお例年なら第一部で各中学校出身者による
中学時代のフラインド上映や恩師との再会が会場
を沸かせるところでしたが、今年は「実行委での
協議の結果」といって実施されませんでした。
た。保護者や関係者の中には「あれが温かくて良
かったのに…」と残念がる人が何人もいました。

得意分野で社会貢献

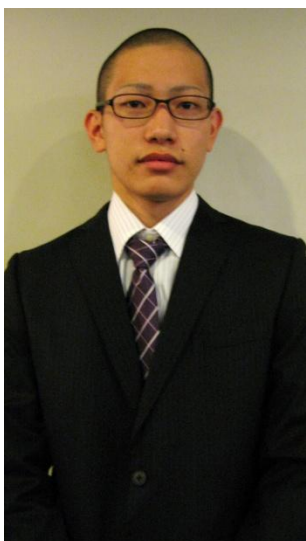
新成人にぶっつけインタビュー

「港区成人の日 記念のつどい」(19頁)に参加した新成人に、今の気持ちやこれからの生き方について、ぶっつけで個別インタビューを試みました。どの感想・意見からも、困難の多い世の中でも自分の個性や得意分野を生かして社会に貢献したいとの意欲が感じられました。

× × × × ×

有機化学で社会に貢献したい

市岡 新妻 裕介さん
(にいし ま ゆうすけ)



「成人になり、一人の人間として自立したことを自覚する」と共に、「これから社会に貢献す

る生き方をしなくてはならないと強く思いました。今日の『つどい』では、橋下市長が『自由を満喫しよう。しかし大人としての責任も自覚しよう』『一生懸命頑張れば必ず周りが支えてくれる』と強調されていたのが印象に残りました。これまでの人生で一番苦しかったのは大学受験期ですが、家族や先生方の支えで乗り切ることができ、感謝しています。逆に一番嬉しかったのは、こうして成人の日を迎えられたこと。また一番プラスになったと思うのは、中学・高校時代の校長先生の朝礼あいさつです。毎日色んなことを話して下さいましたが、特に、いつも最後に言われた『君たちには社会に役立つ力がある。自分を信じて頑張れ！』という言葉が今も心に残っています。気になるのはやはり卒業後の就職の見通しで、自分のことはもちろん、社会全体で誰にも厳しい状態が続いているのが不安です。その一方で、東京オリンピックの開催が決まったことは、とても嬉しく、期待が持てます。また、生まれ育った港区が、戦前のような繁栄と活気を取り戻してほしいと願っています。将来は有機化学の研究で社会に貢献できます。

よう、しっかりと勉強したいと考えています」(市岡在住、市岡小→清風中→清風高→関西学院大学理工学部2年生)

× × × × ×

家庭から夫の仕事を支えたい

夕風 黒石 菜々さん
(ゆうふう くろいし なな)



「成人になって、港区でもどこでも、信無視など大人として恥ずかしい行為はできないなと身が引き締まりました。今日の『つどい』では新成人代表による『成人のつどい』、特に『自分たちが港区を引っ張っていく』と『言葉に力強さを感じました。これまでで一番嬉しかったのは、昨年八月に二十歳の誕生日を祝ってもらったこと。親族や友人が『素直に』『自分らしく』『なごい言葉』を贈ってくれました。一番嬉しかったのは、高校を卒業して中央区の日本料理

店に就職する時。面接で教わった接客マナーなどを必死で覚え、五日後にテストされ、何とか合格できたのですが、その五日間は本当に苦しかったのを覚えています。でも就職してからはずいぶん強くなったリーダーシップを発揮して楽しく働くことができました。お陰で、このお店での一年間の経験は私の人生の貴重な財産になりました。今の社会では、殺人事件が絶えないこと、原発事故や大震災からの復興が進んでいないことが気になり、何とかならないかと心が痛みます。その一方で東京五輪の開催はとても嬉しく、ぜひ成功してほしいと期待しています。カジノ誘致の是非が議論されていますが、景気が良くなると思っているので私は賛成です。また、母子家庭で育った経験から、国はもっと社会保険に力を入れ、弱者が安心して暮らせる世の中にしてほしいと願います。今は仕事を離れて結婚の準備中ですが、結婚後は、電気工事会社を経営している夫を家庭からしっかり支えていきたいと思っています」**夕風在住、三先小→港南中→大正高→日本料理店勤務→結婚準備中**

安心社会へ力を発揮したい

八幡屋 やまだ ひろあき
山田 弘明さん



「成人になって、もう悪ぶりは出来ないな大人として恥ずかしい行動をしなければいけないなど気が引き締まりました。今日は中学時代の友人と再会して『みんな変わってないな』と感じると共に、市長が自分の経験を話して励まして下さったのが参考になりました。これから一番辛かったのは、約四年前、祖父が病気で亡くなったこと。とても可愛がってくれた祖父に今日の姿を見せたかった。その一方で、一番自分のためになったと思うのは、去年経験した難波でのホストの仕事です。わずか二、三カ月のことでしたが、先輩がよく面倒をみてくれ、オーナーもとても期待してくれ、自分に自信が持てました。今の社会で気になるのは戦争や飢

えで死んでいく人が後を絶たないこと。何とかならないかと心が痛み、そうした戦争や犯罪のない、安心して暮らせる世の中になってほしいと願っています。その一方で、東京オリンピックの開催が決まったことは、これによって景気の回復も予想され、とても期待が持てます。将来は警察官などの公務員になって安心できる社会づくりに貢献したい気持ちもあり、一方で、イタリアのベネチアのような素晴らしい街並みを日本にも実現できたらという、建築分野での抱負も持っています」**八幡屋在住、八幡屋小→港南中→大正高→大阪産業大学 学部2年生**

記念写真は写真館で

お宮参りも百日も



みなさまの写真スタジオ

三上写真館
Photo Studio MU

三上写真館
0120-813788

http://www.photostudio-mikami.com

誕生日も父の日も

三上写真館

至升天小頭
港南区センター
中央大通り
三社神社
至みなと通り

港消防署
大宮町
至同中学

障害吹き飛ばす笑顔！

「あいさぶまつり」多彩な催し



→聴覚などに障害のある人たちが演奏など多彩な出し物を楽しんだ『第5回あいさぶ祭り』

11月18日、港晴の「あいさぶ工房」で

聴覚障害に加えて様々な障害を併せ持つ重度の重複聴覚障害者が仕事や生活や活動を通じて社会参加を実現していくための通所施設「あいさぶ工房」(港晴)が、地域との交流を目的に催す「あいさぶ祭り」。今年も二月十八日に開かれ、多彩な催しに同工房の利用者やスタッフ、関連団体や地域の人々の笑顔が溢れました。二〇〇七年の開設以来、五回目。

◆「楽しい一日」と理事長

午前十時半に二階のメイン会場が始まった開会式では主催者を代表して社会福祉法人大阪聴覚障害者福祉会の西條正晴理事長が「皆さんの顔を見て元気が出た。色んな人の力でこの建物ができて七年。あつという間だった。今日も多くの人たちの支援でまつりが開催でき、とても嬉しい。楽しい一日になることを願っている。私も九十歳近い超高齢者となったが、これからも頑張っていきたい」とあいさつ。港区聴覚障害者協会の有田克直会長が「お元気ですか。風邪など引いていませんか。一昨年会長になり、他の役職も兼ねています。今日は皆さんの協力をお願いします」と呼びかけました。

「楽しい一日」と開会あいさつをする西條理事長(上)と港区聴覚障害者協会・有田会長(下)



また港区役所から田端尚伸区長が訪れ、「何度か参加させてもらったが、そのつどバージョンアップされていてびっくりしている。港区では小学校単位のまちづくりを進めているが、あいさぶ工房は地域の防災訓練に参加されるなど地域と連携した活動を積極的に展開されており、敬意を表したい」と祝辞を贈りました。

◆和太鼓演奏や手話コーラス

舞台発表では、和太鼓演奏、お面舞踏会、パントマイム、南中ソーラン、手話コーラスなどが昼休みを挟んで次々と披露され、最後は抽選会で盛り上がりました。

このうち「和太鼓演奏」では、聴覚障害者中心の太鼓サークル「吹田ろつあ太鼓 和龍耳」の

メンバーが迫力と変化に富んだ演奏を披露し、プログラム冒頭を華やかに飾りました。

また「お面舞踏会」では、ボランティアの男性が何重にも付けた能面を次々とはがして会場の人たちにも被らせながら踊りの輪をどんどん広げていく様子が、不思議な雰囲気（かも）を醸していました。

また、パントマイム二年の思ひ出ボロボロでは、聞こえに関係なくみんなが一緒に楽しめる手話エンターテイメントを振舞っているグループ「手話エンターテイメント発信ネットワーク・O・O・O」のメンバーが、「きもだめし」「ニ



→ 迫力と変化に富んだ和太鼓演奏を聴かせた「和龍耳」(上)と、パントマイム風の芝居で仲間(下)の愛と支えを表現した「O・O・O」(下)

← 舞台発表やあいさつに笑顔で応える参加者(上)と、大家族のような雰囲気だった昼食風景(下)



人ほつちの夜」「泣きながら歩く」「上を向いて歩く」「待ち合わせ」など場面を次々変えながら、誰にも愛されないとしょげていた主人公が、実はみんなから支えられ愛されていると気づくストーリーを展開し、最後は手話混じりの「幸せなら手を叩こう」を会場と一体で大合唱、大きな感動を呼びました。

◆おでん・もちつき・焼うどん

昼休みには一階でボランティアによる飲食模擬店が一斉に開かれ、「引換券」を手にした参加者が、おでん・焼うどん・もちなどを受け取っては大食堂で食べていました。中庭ではもちつきや焼うどんづくり、食堂ではおでんづくり、

廊下ではパンやケーキの販売が同時進行し、会場全体が大変な賑わいを呈していました。

閉会式では、利用者の自治会である「あいさぶフランス会」の小牧加奈会長が「楽しんでもらえましたか。パンを食べてもらえましたか。私が作りました。今日は楽しんでもらえてよかったです」、あいさぶ家族会の山本規行会長が「年々盛大になり、地域やボランティアやサークルなど大勢の人たちの協力で楽しい一日を過ごせた。家族会としても嬉しい。これからもなお一層のご支援をお願いしたい」とあいさつ。

最後に主催者を代表してあいさぶ工房の平田幸也施設長が「二百五十名を超える参加があったと思う。利用者は練習を重ね、職員も毎日遅



→「これからも支援をよろしく」と閉会あいさつをする家族会・山本会長(上)と平田施設長(下)

くまで準備に携わった。その成果を見て頂けたでしょうか。こういった活動は職員や利用者だけでは成り立たないので、地域やボランティアの方の協力が必要。これからも一層頑張っていきたい」とあいさつ、ボランティアや地域の協力を二層の期待を表明しました。

◆一大家族の奮闘記

舞台発表に参加者が両手を挙げて応える光景からは、厳しい現実の中で心を寄せ合って生きる障害者のたくましさや一体感が、障害のある人と障害のない人が昼休みに一緒に飲食しながら「コミュニケーションを交わし合う光景からは、まるで一大家族のような温かさが、また昼食時間をめつたり二時間もつたプログラムからは、障害ある人たちへの気配りが、「和太鼓演奏を体験してみませんか」との呼びかけに希望者が殺到した光景からは、子供のような好奇心を失わない障害者の純粋な心模様が、それぞれ伝わってきて胸を打ちました。

◆ボランティアの支え心強く

終了後、あいさぶ工房の職員を通して、まづりに参加した入所者の感想を頂きました。この

うち男性Aさんは次のように話していました。

「私は聴覚と小脳に障害があります。自治会として普段は司会を担当し、今日は舞台上で歌を歌いました。練習は二カ月前に始め、一カ月前からは『本番で間違わないように！』と本気モードになりました。新しいボランティアさんだったので『本当にあいさぶ工房を支えてくれるたくさんの人たちがいるんだ』と心強く思いました。あいさぶ工房には二〇一〇年八月に入所し、薬器の検品や出来上がった商品を納品する時の運搬の仕事をしています。毎日の生活の中では手話でお喋りするのが楽しいです。仕事はなかなか見つかりませんが、就職して高い給料がもらえるよう頑張りたいと思っています」

◆会社でたくさん給料もりたい

また女性Bさんは次のように話していました。「私は耳が聞こえません。今日は自治会として歌を発表し、最後に自治会長としてあいさつしました。昨年十月に打ち合わせを始め、役員みんなで手話歌の練習をしました。本番では緊張しましたが、大体うまくできたと思います。あいさつを少し忘れてしまったのが反省点です

が、みんなで歌ったりお面をかぶって踊ったりできて、とても楽しかったです。あいさぶ工房には二〇〇九年二月に入所し、パン班に所属してパンの成形やドーナツ作り、シヨップでの接客などを担当しています。毎日の生活の中では、難波、梅田、神戸などへ遊びに行くのが楽しみです。給料が少ないので、もっと遊びたいけど我慢が必要です。これからも頑張って会社に入り、給料をたくさんもらいたいです」

◆あいさぶ工房の概要

あいさぶ工房は「聴覚障害のほかに知的障害や精神障害、肢体障害や視覚障害などを二重三重に併せ持つ^{あわ}重度の障害者が、仕事や生活や色々な活動を通じて、人としての豊かな暮らしをつくり出し、持っている力を発揮して働き、社会参加を実現していく」ことを目的に二〇〇七年四月に開設。社会福祉法人大阪聴覚障害者福祉会（西條正晴理事長）が運営。施設の一階で手作りパンの販売・喫茶も。ボランティア募集。港晴一・七・四、☎四三九五・七五八八、FAX四三九五・七五八九。

街の防災は自分たちで

商店街などで「防災まつり」



→「街の防災は自分たちで」と催された「防災まつり」。写真は東日本大震災をテーマにした子供音楽劇Ⅱ1月18日、港近隣センターで

阪神・淡路大震災が発生した一月十七日を挟む一月後半、区内の商店街などによって「防災まつり」と題する一連のイベントが催され、工夫を凝らした企画の数々に、参加した区民が防災意識を新たにしていました。このうち一月十八日には港近隣センターで「防災劇場」と名付けた催しが八幡屋商店街の主催で行なわれました。

◆「防災落語」で大笑い

この中で市岡在住の若手落語家・桂福丸さん（かきふくまる）は「防災落語」を披露。大阪の長屋で家財一切をリアルな壁絵で揃えた男の家に押し入った泥棒（どろぼう）が、何も盗れずに逃げ去るのを、男が追いかけるが逃してしまい、「近所の人の絵も描いてもらたうかった」と近隣づきあいの大切さに気付くというストーリー。子供にも分かる優しい表現、テンポよくメリハリの利いた語り、灘中→灘高→京大卒のエリートらしくらめ砕けた雰囲気が大爆笑を誘いました。

◆「津波」テーマに感動の音楽劇

また、音楽学校の生徒グループ「はーもにらんど」は音楽劇「T-SUNAMI」を上演。東日本大震災による津波で大切な人や物を一瞬に

←「防災落語」で大笑いを取った桂福丸さん①と、防災写真を観る来場者Ⅱ港近隣センターで



奪われた子供たちが、恐怖と絶望にひしがれながらも、何気ない日常の大切さに気付き、「支えてくれた人たちの約束を果たすために」「希望を持って強く生きよう」と立ち上がる過程を、基本がしっかりとできた歌唱やダンスや台詞（せりふ）で表現し、感動を呼びました。

「防災劇場」ではこの他、サックス演奏や防災グッズ販売、防災写真展示、子供向け防災ワークショップなどが行なわれ、参加者は「楽しみながら防災の大切さを再勉強できた」「港晴の七十年代女性」などと感想を話していました。

なお、南市岡でも繁栄商店街の主催で「防災まつり」が同様の内容で催されました。

筆家で新年きりり

三先の天満宮で恒例書き初め



→筆字で新年のスタートを切り、地域の人たちがふれあった「書き初め・書道展」11月2日、三先の天満宮で（瀬戸マヨ子さん撮影）

「書を通じて地域のふれあいを」と1月1日

てんまんくう

やすね

ぞ

三先の天満宮（村岡康生宮司）で「書き初め・書道展」が催され、三先・池島地域を中心に「百人

以上が参加しました。天満宮奉賛会（貴田太五

会長）が呼びかける正月恒例の行事で九回目。

◆その年の目録

朝十時すぎ、社殿の大広間には三先・池島岡

しんね

小学校児童が昨年末の授業で書いた「希望」「一

歩」などの筆文字が何枚も貼り出され、爽やかな

すみ

墨の匂いが立ち込める中、初参加という八十

代女性を皮切りに、親子連れなどが次々と来場

座卓の上に用意された筆を手に取り、半紙に向

かいました。

「年初に気分を引き締めたくて」「一年の抱負

を筆で」「冬休みの宿題を片付けるため」など目

的はそれぞれですが、主役は子供たち。「背筋を

伸ばして」「筆を立てて」「バランスを考えて」

「などと父母や地域の人たちがアドバイスする

中、何枚も練習を重ね、「未来の夢」「美しい空

などの力作が次々と誕生しました。

「この行事を毎年伝える本紙を見て初めて来た

という人もあって、開場からほどなく席が埋ま

り、家族づつしが慌だだしく入れ替わったり、

ぶんちや

奉賛会会員が「文鎮が足らんようになった」と

買いに走ったりする光景も見られました。

◆書を通じてふれあい

「ついで午後三時」ごろまでの間に参加者が

次々と書き上げた書の一部は、一般の参拝者が

「良縁」「家内安全」などと筆書きしたものと合

わせて、神前に奉納されました。

しんせん

筆や半紙の手配、甘酒ふるまいや綿菓子、プ

あまね

ゼントなどに動いていた瀬戸信行さん（六八・

のりや

マヨ子さん夫妻は「今は電子機器の発達などで

筆を持つ機会が少なくなりましたが、こうして

年の初めに筆字で気持ちを落ち着け、良いスタ

ートを切って頂けたら、また書を通じて地域の

ふれあいが生まれたらと、毎年お世話させて頂

いています。天気が良かったこともあって、今

回はこれまで以上にたくさんの人たちが参加さ

れ、とても嬉しく思うと共に、こうした行事に

参加される家族はやはり、言葉づかいなど色々

な点でキリッとしているなあと感じました。こ

の催しがさらに定着し、広がっていくことを願

っています」と話していました。

気迫の動きで魅了

新年の三社神社で武道奉納



→港区の発展などを願って様々な演武が奉納された「神道夢想流杖道演武会」Ⅱ1月11日、三社神社(写真は霞神道流剣術の演武)

気迫のこもった掛け声と動きが境内を心地よく震わせました。新年恒例の「神道夢想流杖道演武会」が一月十一日午後、三社神社(磯路)で開かれました。波除在住の佐藤政子さん(演歌歌手・藤かほりさん)が代表を務める「神道夢想流杖道 井天道場」の主催で八回目。区民の安全と健康、港区の発展などを願って道場生ら二十数人が様々な種類の演武を奉納しました。

◆杖道・鎖鎌・居合など次々と

演武に先立って本殿でお祓いを受けた演武者たちは、凛々しい紺や白の稽古着姿で登場し、本殿に一礼。今回初披露となった佐藤代表によるお祝儀舞「三番舞」が境内をひときり華やかせたあと、①神道夢想流杖道②霞神道流剣術③全日本剣道連盟杖道④一心流鎖鎌術⑤柳生流居合術⑥英信流居合術⑦一角流十手術⑧内田流短杖術などが次々と披露されました。そのうち冷えた空気のなか、礼に始まり礼に終わる一連の拳動・無駄のない機敏な動き、「エイ」「オウ」「トア」「ハア」などの力強い掛け声、相手から瞬時でも外さぬ鋭い視線、男性の迫力と女性の切れの溶け合い、また鎖鎌や十手を

←演武に先立って本殿に一礼する全演武者①と、お祝儀舞「三番舞」を披露する佐藤政子代表②



使つての時代劇さながらの立ち合い、さらには真剣にやる居合術での緊迫感などが印象的で、見物に訪れた人々は司会者が種目ごとに加える簡潔な解説にも興味をそそられながら、「なるほど」「見事やなあ」「気が引き締まるなあ」などと感心し、盛んに拍手を送っていました。

◆「楽しく続けたい」と道場生

終了後、道場生に訊きました。杖道の十二の基本形などを披露して拍手を浴びていた小柳舞美さん(二五)は、日本の食料・農産物・自然を海外の害虫や病気から守る仕事に携わる公務員。昨春、神戸植物防疫所関西支所から大阪支所(築港)へ転勤してきたのを機に、ネットで「何

「上は杖道の基本形を披露する増田さん(右)ら、下は杖道の制定形を披露する北野さん(左)ら」



か気持ちよくできるスポーツはないかな」と探したところ、日本の伝統文化を学びながら運動できる「杖道」が目にとまり、興味を惹かれ、弁天道場に通うことになったそうです。

「武道といいつつで最初は厳しいイメージも持っていましたが、護身が基本で、しかもキャリアのある方たちが丁寧に優しく教えて下さるので、安心して習えています。色々な形を覚えるのが大変といえは大変ですが、これまでに十二の基本形や六つの制定形を覚えしました。覚えた技が決まった時はとても気持ちいいですが、気合いの入れ方などはまだまだだと思っています。これから興味として楽しく続けていきます。」

いです」と話していました。

◆「人思いやる心で精進」と代表

佐藤代表は「今年も区民の皆様が今年一年、無事に過ごされますよう念じて奉納させて頂き嬉しく光栄に思っています。練習生は全国大会出場などそれぞれの目標を持ち、各種武道もと入れて稽古に励んできましたが、今年も弁天道場の名に誇りを持ち、人を傷つけず、人思いやる心を持って精進して参りたいと思っています」と話していました。

◆4百年の伝統 多彩な展開

佐藤代表によると、杖道とは四百年の伝統を持つ神道夢想流杖術を母体として発展普及し



→上は鎖鎌術を披露する広瀬さん(左)、下は居合術を披露する笹井さん(左)と谷川さん(右)

「上は十手術を披露する黒川さん(左)、下は短杖術を披露する佐藤代表(右)」



た武道で、杖と呼ばれる長さ約二・二八メートルの丸木の棒を自在に操ることで剣・槍・薙刀などの長所を採り入れた多彩な展開が可能。その技は一百を超え、全てマスターするには十五二十年を要するとされています。また「杖一本で身を守る護身術」左右を均等に使う理想的な日本古来のエアロビクス(「気の効用による心身統一法」としても近年人気を高めています。

なお、同道場は毎週水・土曜日の十八時半～二十時半に市岡元町三・二二・二六(三和住建内)で稽古。問い合わせは☎六五八三二一五四(四小山 悟さん)まで。8頁「あれこれガイド」に杖道体験講習会(無料)の案内あり

スポーツ短信

●大阪・港ホーイズ(少年硬式野球) 一月五日

今年一年の選手の安全とチームの成長を願って三津神社に参拝し、新年初練習。十八日には小学校を招いて「港林ソフトボール大会」(大阪・港ホーイズ主催)を開催。一月は体験練習を予定。硬式野球に興味のある小・中学生の体験練習・入部説明随時。 ☎六五七二・六七五三 木戸さん又は ☎〇九〇・八三八五・四八二五 香西。

演劇ガイド

●あながいおまる一座特別公演・音楽劇『大阪希望館』

あの名作がまたまた還つて来た。戦後大阪の浮浪者保護施設を舞台にした涙と笑いの人情ミュージカル。破壊と絶望、飢餓と貧困の中から立ち上がる人々、その愛憎や葛藤のドラマを通して生きる意味を問いかける。直木賞作家・難波利三原作。綾羽一紀脚本、あながいおまる演出。出演はヨッシー原本、浜木克行、梶岡志保ほか。子供出演多数。三月 十九日(土) 十五時、二十日(日) 十一時、十五時に世界館波

除六・五・一五、☎六五八七・九八四で。鑑

賞料金は当日三千二百円、前売千八百円、子供は共に千一百円、団体割引あり(十枚で二〇割OFF)。詳細問い合わせや申し込みは主催の石炭倉庫(波除六・五・一八、JR弁天町駅から国道四三号を北へ直進、安治川堤防突き当たり右すぐ)。 ☎六五八一・〇六六四、チケット専用フリーダイヤル〇二〇・三三四・三三九へ。

ライブ情報

●八幡屋出身ロックドラマー 桐田勝治さん

二月十五日(土) 十八時半から神戸チキンジョージで、三月九日(日) 十八時から奈良ネバーランドで、三月十五日(土) 十八時半から大阪ロックタウンで、所属バンド「ガーゴイル」のワンマンライブ『春射る矢』に出演予定。



→ 桐田勝治さん(上)とペドロロさん(下)

●三先のフォーク歌手ペドロさん 毎月第一・

三木曜 千時サ・セラー(中央区西心斎橋 ☎六二二一・六四三七)▽毎月第三火曜 千時かつおの遊び場(中央区宗右衛門町 ☎九〇・五八八・七〇一五)▽毎月第一火曜 千時半ロージ(中央区西心斎橋 ☎六二二三・三九九九)。

●市国元町の音楽ユニット「花☆キャラ」

ポプスから沖縄民謡まで生活に根ざした前向きで分かりやすいオリジナルソング▽CD『マルグリータとトマトパスタ』『あなたらしくあたらしく』『好評▽一月二十五日にPick(奈良市三条町)で開催された「長野たかし(元赤い風船・森川あや)ライブ」の冒頭に出演した。



→ 花☆キャラの演奏風景

人生の可能性を問う

あんがいおまる一座『三部作』に反響



→絡み合う三つの物語を通して人生の可能性を問い、反響を呼んだ『三部作』 11月 波除の石炭倉庫で『写真』は『緒方さんの失敗』から

中年男、若い女、若い男のそれぞれのドラマを通して生きる意味を問う三部作『緒方さんの失敗』『折れた翼』『村は消えた』が1月下旬、波除のリースペース石炭倉庫で上演され、反響を呼びました。石炭倉庫を拠点に庶民の生活感情や社会的メッセージを込めた演劇を世に問い続けるあんがいおまる一座のスタジオ公演。作家・中村路子さん(読売新聞「大阪女性文芸賞」受賞)の原作・脚本で、あんがいおまる座長が演出。ヨッシー原本さん、高島奈々さん、浜木克行さんが各主演。八上和裕さんによる巧みな音響・照明が舞台を彩りました。

◆中年男の自暴自棄

『緒方さんの失敗』 車で若い女をはねて歩けない体になってしまい、その償いに追われる五十代の元新聞社部長・緒方。失職し、離婚したあと、自暴自棄に陥り、義弟(元妻の弟)が営む天麩羅屋の二階で酒浸りの生活を送っている。少女の生活を見るための形式的な結婚を考えたが、賠償金を賄うために出版社を興したりするが、「みんな自分のためだ」と少女に否定され、揚げ句に事業も失敗、詐欺に遭って大損し、お

まけに交通事故で自らも車いす生活に。時は一九七三年。折からのトレット・ペーパー騒動に「あるのにな」と騒いでいる」とその本質を冷やかに眺めながら、やがて自らの人生にも心を向ける。「社会的に全てを否定されても生きていくだけで価値がある」とあるのになと思っていたのが僕の失敗だった。そう気付くと同時に奇しくも、別れた妻と娘が再会に訪れた。

当時の世相に主人公の心情を重ねた展開が、テーマを一層浮き上がらせた。圧巻はヨッシーさんの一人芝居。浅ましいほどの飲みっぷり、今にも小便が漏れそうな仕草など、細かい動きにも鋭い観察眼と豊富な稽古が感じられました。また話の重さを和らげるような、ほの明るいテーマ音楽が心地よく耳に響きました。

◆若い女の絶望

『折れた翼』 「私は歩くことができた、笑つていきました、あの時まで……」。緒方の車にぶつられて一生歩けない体になれた美鈴。腹いせとからかい半分に緒方の義弟・俊一に結婚を申し込むが、意外にも承諾される。「私への慰謝料が目当てなの?」「そうじゃない。美鈴ちゃん

と生きていきたいんだ。俊一の純粋な愛に次第に惹かれていく美鈴。身体障害への絶望、俊一の店の火災、さらには俊一との間を裂かれた友人の複雑な思いなどに悩み、揺れながらも、やがて美鈴は新しい道、俊一と生涯を共にする道を力強く歩み始めるのだった。

涙を溢れさせるほどの感情移入をした高田さんの熱演は観客をヒロインの心情世界と一体化させる力があり、一見冷たい視線の中に温かみを含ませた友人役・廣中美咲さんの演技は物語に真実味と厚みを持たせていました。また美しいピアノの旋律は少女のシリアスな感情の起伏を情緒豊かに伝える役割を果たしていました。

◆若い男のトラウマ

『村は消えた』 山奥の中学を出て、今はじがない町の天麩羅屋を営む俊一。交通事故を起こして廃人のようになった義兄・緒方を二階に住まわせているが、事故の被害者で、両足を不自由にされた美鈴から突然、不可解な求婚を受けて戸惑っている。その俊一には乗り越えられないトラウマがあった。昭和十八年七月に和歌山県花園村を襲った未曾有の水害。豊かに与

←若い女性の絶望が生きる希望へと変わる『折れた翼』⑤と、若い男性のトラウマが力強い愛へと変わる『村は消えた』⑥の各一場面



え続けてくれた自然が、恩恵を利用するばかりの人間に復讐するかのよつな凄まじさ。その中で、自分の代わりにボールを探しに家へ戻り、一度と帰らなかつた父。「父ちゃんは俺が殺してしまった」。焦だつた父の姿に誇りを感じていた美しい故郷。しかし父を奪つた恐ろしい故郷。今後の人生のため、自らの原点であるかがえのない故郷と正面から向きあふつ必要を感じていた俊一は、迷いを乗り越え、逆に美鈴への求婚を決心する。「君の強さが必要なんだ。一緒に生きてほしい」と。

自然災害を題材とするよつべ、一青年の生き

方に留まらず、大自然と人間、神と人間という人類最大の問題までもがテーマとして浮かび上がり、作品に一層の奥行きと深みを与えています。少年の日の喜びが悲痛な叫びに、青年の繊細さが力強い愛へと転化していく過程を、頬に涙を光らせて表現し切つた浜木さんの演技には、稽古に裏打ちされた質の高さを感じられました。また、水害の凄まじさを目の当たりに感じさせた音響、真に迫つた村人役たちの演技は、物語に一層の真実味と迫力を与えていました。

◆誰にも可能性が

「人がいて、そこに関わりがある限り、誰にも可能性はある」。三つのストーリーを通じてそんな共通テーマが浮かび上がってきました。また、立場が違つてもよく話し合えば分かり合えること、誰の心の底にも優しさや太らかさがあること、誰の心を教えられると同時に、競争と孤立の中でつたことが難しくなってきた現代社会の在り様にも想いを向けさせられた舞台でした。また三作品をこの順序で観ても共通の主題に至れる構成が鮮やかでした。

港区民の手記をもとに、地元在住の作家・青木健一さんが虚構として綴る『当地ドラマ』シリーズ第四弾は、潜水夫として生きてきた港区の八十年代男性が四十数年前（一九七〇年頃）、和歌山の港町で耳聞した不思議な話――。

絵の中の女（下）

（前号あらず）潜水夫だった私が四十歳の頃。紀ノ川の沖合で大きな仕事を手がけたものの思わぬ結末に仕事を打ち切られ、挫折感をもって宿に引き揚げた。気晴らしに宿の向かいの彫刻家の家を訪ねたところ、その男は一枚の掛け軸を見せた。江戸の画家・田川応義の作と思われる、そつとすぼみと美しい女の絵だった。男はその絵について、応義が究極の女性美を表現するために美の娘を絞め殺したと、いつ美術史にもない謂れを語った後、更に話を継いだ――。

「もつ三十年ほど昔になりますかのし。埼玉県のあるお寺にあったこの絵を、噂を聞いてひと目見たいという男の人がおられます。尋ねまわって行ってみると、仕職の奥様が出られ

てのし、掛け軸の鑑賞を申し出るし、『そげざんまで居たのですが、今は出かけて留守です。しばらくごいなかで待つて下さい』と言われたそうなのよ。その人は奇妙に思いつつも仕方なく、『飯でも食べるかと思いついて、出て見ると、寺の横に俄かづくりみたいな飲み屋が見えてのし、他にこれといった店もなさそうなので、入ったそうなのよ。客は誰もおらず、若い女が一人、奥から出てきたので酒』『飯を注文したそうなのよ。女は顔も肌もとても綺麗やったが、まるで曲の気がなく、おまけに奇妙なことごとく、ひと言も喋らんかったそうなの。』気味の悪い女だな』と思いつながらも、その人はちびちびと自分で酒を注いで、『それにしても墨で描いた絵が出かけて留守だとは、聞いたこともない話だ。そんな馬鹿なところがあるものか』と呟きながら、肴をついついて時間をつぶしたそうなのよ。一時間は経つた頃、『せつないだろつ』と勘定を催促するおとこついつい訳か、呼んでも女は現われなかったそうなの。仕方なく適当に金を置いて店を出て寺に戻ると、奥様が『そげざん帰って来ました。ごいせめめへっ

り』覧になって下さい』と何食わぬ顔で床の間へ案内してくれたそうなのよ。その人は掛け軸をしばらく見ていたがのし、『ごつも見た顔だ。思い出せない。しかし、確かにどこかで会っている…』と考え込んだそうなのよ。と、突然心の中で叫び声を挙げたそうなの。『まさか、そんなことがあるはずがない。さつき食事した飲み屋の女。そつといえは気味の悪い女だった。まさか、まさか…』そして振り向くと、そこに奥様の姿はなかったそうなの。おまけに、よく見ると、そのお寺は荒れ果てた廃寺で、薄暗い中で、ただ絵の女だけがこちらをじつと見ていたそうなのよ。ちよつとごみみたいな日暮れ時やったそうなのよ――」。

「ごまで喋り続けた男は、茫然と立ち上る私の心の動揺を見透かしたように、腰かけたままめつと顔を上げた。『え、そんな話が、この絵にはあったのですか…。し、しかし、それについても、ごいせつて、三十年も経つたら、その絵がどこにあるのですか』と不思議問ですのし。男はいかにも落着いた様子で、先はじからの微かな笑いを浮かべながら答えた。

「実はそのお寺を訪ねた男といつのは、若い時の私やったんですよ。あんたと同じように美術に興味を持ってましてのし、ええ作品があるって聞けば全国どこへでも訪ねたもんですよ。ただあんたと違つのは、私は美術を、彫刻を、一生の仕事にしてしまつて思つたんですよ。ところがなかなか上がらんなくて、何かきっかけになるもんが欲しゅつて、臺にもする思いで訪ねたんですが、あのお寺やったんですよ。奇妙な体験をしましたがあの絵だけは、あの後の戦争の中でも、大事に大事に今まで守つてきましたんやしてよし。人には気味の悪い絵かもしれませんがのし、私にはこの絵が芸術の師匠であり、妻でもあるんですよ——」。

既に男の顔からは笑いが消え、代わつて真摯な、あるいは一途なやつともいふような表情が浮かんでた。私にはそれがいいよ、奇妙に映つた。「師匠であり…妻…ですか…」。「そうですよし。芸術を極めようとする志士の心で、親を想つ娘の心が一つになったこの絵こそ、私の永遠の師であり、永遠の女性、つまり妻なんですよ」。

きつぱりとした口調に、私は返す言葉がなかった。そして不思議なことに、つい先ほどまであった、奇怪な物語に対する怪訝さ、気味悪さは消えて、何とつか、純粋な物に對峙した時の、晴れやかで、爽やかな気持ちさえ込み上げてきた。ちよつと男の表情にいつの間にか、一途で真摯なものが浮かび上がつていたように。「ありがたうございました」。その時の正直な気持ちを、私は実に素直に口にした。この男の話がどこまで真実かは分からない。またどんな意図であんな話をしたのかも定かでない。が、この男の彫刻、この男の家、この庭、この男の喋り方、この男の風体、それらを私の心の箱に入れてガラガラと回し、ポンと出た答えが「ありがたうございました」だったのだ。

いつの間にか日は落ちて、男の顔も、彫刻の鷹も、薄闇に溶けていた。雨粒がぼつりと頬にかかった。男は掛け軸を素早く部屋に入れこんで、鷹の彫刻も十間へ移した。「よつぱ降らんつちに早よ帰りやしてよし」。

十間を抜けて二人で表へ出ると、向かいの宿には既に明かりが灯つていた。「潜水の仕事、

大変やるけど、頑張りやしてよし。あんたはまだ若い」。思わず男の顔を見た。明かりのない玄關でも、その表情には笑いが、それも実に爽やかな、励ますような笑いが浮かんでいるのが分かった。負けないくらいに晴れやかさで私も笑ひ返した。

宿に戻ると帳場から女将が声を掛けてくれた。「どうでしたかのし」「ありがたうございました。実に、実にいい物を見せてもらいましたー」「それは良かったですのし。明日は帰れるんですかいの」「はい。お世話になりました」。

明日は久しぶりに大阪の我が家か。「そうだ。俺にも永遠の女性がいます。心優しい妻が。可愛い子供たちも。誇れる仕事もある。そして永遠の師匠がいる。たええ人から、会社から、打ち切られても、打ち切られても、見守り、導いてくれる、海といふ永遠の師が——」。

一階から潜水仲間の笑い声が聞こえてきた。仕事を打ち切られたショックはもう癒えたのだろつか。階段を上りながら、安宿の屋根を打つ雨の音が、そしてそれを包み込むような波の音が、心地よかった。

(おわ)

平和のため

戦争体験

語り継ごう

今月の語り部

猪伏 昌二さん（元田中佳良）
⑩



前まで 昭和四（一九五九）年、北朝鮮の元山に生まれた私は、中国大陆での戦火を背景に満州（中国東北部）東部の町・図們、次いで延吉で育った。対米英戦が始まり、戦争一色の中学校生活を送った。昭和二十年八月、突如

のソ連参戦に緊張が走る中で敗戦。日本人街は廃墟と化し、避難生活は悲惨を極めた。その中で遭遇した満蒙开拓青少年義勇軍の悲劇は同世代として胸張り裂ける思いだった。酷寒と貧窮の中、伝染病で父を失い、豆腐売りなどしながら家族を支えた。二十一年八月、遂に引き揚げが現実となり、延吉駅を出発。国共内戦による鉄橋爆破や現地人による略奪など数々の苦難を乗り越えて長距離を踏破。葫蘆島から駆逐艦で対馬海峡を抜け、博多港に着いた。だがコレラ発生による厳しい海港検疫のため上陸できなかった。（本文は回想録『平和の空よ 永遠に』から本紙が抜粋・再構成）

遂に故国の土、博多から徳島へ

戦後も震災など苦難越え

結局、船は博多湾の洋上に一週間ほども浮かんでいましたが、風や波を受けて錨を中心に船がくるくる回るため、板付飛行場の見える方角が口によって変わることは随分戸惑ったものでした。

◆ふかし芋の味、祖国の愛情

そうしてようやく下船した棧橋では、櫂をかけた愛国婦人会のおばさんたちが腰を曲げて「苦労さまでした」と出迎えてくれました。私にはこれが「日本上陸」を実感した最初でした。そして、そのとき供された蒸かし芋のおいしかったこと！大陸で口にしたことのないその食べ物喉から腹へ落ちるたびに「故国日本」が自分の体へ染み込むように感じられてなりませんでした。

上陸後にはさらに、日本での生活資金として一千元、家族で計七千元が新田で給付されましたが、これにも、敗れたりとはいえ国民一人ひとりへの心配りを忘れぬ祖国の愛情が感じられて胸を熱くしたものでした。とはいえ、それまで肌身離さず持ち続けた旧田は、先にも書きましたが、その時すべてがただの紙くすとなつたのです。

◆妊娠女性の悲劇も

その一方で、大陸で妊娠した女性たちが、当時の厚生省の役人によって船から降ろされ、墮胎させられたと耳にしました。恐らく「郷里で

←持てるだけの物を持って博多港に上陸した朝鮮からの引揚者（昭和20年10月19日）



辛い目に遭わないうつに「言い開きがでさるよつに」といふ配慮からでしよつが戦争による悲劇は特に女性にこそ顕著に表われると感じた出来事でした。因みにこの事件を口外するとは当時堅く封じられ、歴史の表に出せない事

実もあるのだと思い知らされた次第です。

◆大陸との違いに驚く

ともあれ、私たち家族は博多駅から汽車で父祖の地・徳島市へ向かったのですが、まず驚いたのは日本の汽車の小ささでした。「特急アジア号」など満洲の鉄道の車両は通路の両側に三席と二席、計六席が備わっていましたが、日本のは二席と二席の計四席。スケールの違いは歴然でした（ついでに言つと、その後、徳島で生活するよつになった中で、もう一つ驚いたのは家畜の色でした。大陸では豚は黒く、牛は茶色でしたが、日本では「豚が白い」「牛が黒い」と、それこそ目を白黒させたものでした。

◆広島への荒廃に目撃つ

そんな大陸生まれ育ちならでは驚きも乗せて、汽車は関門トンネルを抜け、山陽本線を東へ向かいました。が、速度は遅く、たしか二日目の夜中によつやく広島駅を通過しました。原爆を投下された」と聞かされていたその市街は、被爆から既に一年以上が経っており、あちこちに灯もありましたが、一面瓦礫の山で、夜目にもその荒廃ぶりには目を覆わずにおれま

でした。

◆故国の香り

その後、岡山県宇野市から宇高連絡船で高松市に上陸。そこから徳島駅まではさほどかかりませんでした。そして、駅前の引き揚げ者専用旅館で一泊したのですが、その庭先で嗅いだ金木犀の何ともいえぬ芳しい匂いは、未だに自分にとっては「故国の香り」として脳裏に刻まれています。

振り返れば、八月十六日に延吉を出発し、徳島市に着いたのが十月十日。希望と失望、苦渋と安堵、歓喜と悲哀が交錯錯綜する中を、愛する故国めざして老若男女がひたすら助け合い、励まし合つて言結させた、まさに五十五日間のドラマでした。

◆戦後は米穀業に、阪神大震災も経験

戦後、私は昭和二十六年（一九五二年）、二十二歳で大阪市港区へ出、田中町（現・田中二丁目）で鮮魚商、次いで米穀商を営むよつになりました。以後、経営の浮き沈みは、多分に漏れずありましたが、品質第一を心掛けた営業で、多少なりとも戦後日本の経済復興や地域の発展に貢

献できたのではないかと自負しています。

この間、昭和二十九年（一九五四年）には自らの戦争体験も踏まえて「庶民の幸福と平和な日本を実現するにはこの道しかない」と創価学会に入会。翌年には二十八歳で結婚して家庭を構えましたが、昭和三十六（一九六一年）年には拡張したばかりの店舗が第二室戸台風で浸水するという苦難を経験。同六十二年（一九八七年）には神戸市東灘区へ居を移しましたが、八年後の平成七（一九九五年）年には、あの阪神・淡路大震災に遭遇。かつてない生命の危機と生活苦を体験したものの、いずれも家族の結束と地域や信仰仲間との助け合い、そして戦中戦後の苦難を思い起こすことで乗り越えることができました。

また昭和五十六（一九八一年）には延吉市と図們市を訪問、終戦時にお世話になったプリキ屋夫婦の子息らと会って当時の感謝を伝え、何かしら義理を果たしたような気持ちになりました。その後、昭和六十一（一九八六年）と平成九（一九九七年）にも訪問しましたが、中国の改革開放はものすごい勢いで進み、延辺全体も急速に発展して昔の面影は急速に失われていきま

←自らカメラに収めた阪神・淡路大震災の惨状



した。終戦時十万人であった延吉市は今では五十万人を超える大都市になっています。

◆日本と中国と朝鮮の平和な未来を

現在、私は北区で妻と二人暮らし。子供三人、孫は四人。心臓や目や耳や脚に多少の不自由はありますが、自らの戦争体験を語り伝え、書き遺す活動などを通じて、日本と世界の平和のために残る人生を費やしたいと考えています。

そして今、自らの半生を振り返ってひと際鮮やかに思い返されるのは、やはり我が青春も重なる戦中戦後の激動期、朝鮮で、中国で出会った人々のことです。特に望郷の想いに駆られてつづ異土に果てた同級生、軍人・軍属、満蒙開

拓青少年義勇軍、開拓団、居留民、そして民族を越え、敵味方を越えて友情と親切を示してくれた現地の人たち―その「冥福を表心よりお祈りすると共に、日本と中国と朝鮮半島の平和な未来を終焉の地から静かに見守ってほしい」と心から念ずるものとす。

最後に、私が信奉する創価学会・池田大作名誉会長の著『新・人間革命』の一節を添え、拙き我が戦争体験の結語にしたいと考えます。

「平和ほど尊いものはない。平和ほど幸福なものはない。平和こそ、人類の進むべき、根本の第一歩であらねばならない」

（終わり）

**戦争体験
平和のために
次世代へ!**

昭和20年の豊中空襲で親戚が全滅した悲惨な光景は今も繰り返し夢に現われます。敗戦の辛さも言葉にできないほどでした。今はゲートボール仲間と楽しい余生を過ごしていますが、この平和が続くようにとの願いから、体験を聞き取って頂きました。（90代女性）

400字（原稿用紙1枚）で
千円が標準料金です。

お話をききとり、冊子
にしてお渡しします。

★文書全般の代筆も承ります★

港新聞・飯田編集事務所 ☎6571-4636

ミニ文化案内

●交通科学博物館

①さよなら企画展Part

「52年の軌跡展」同館が昭和三十七年に誕生し、閉館するまでの約五十年間に、移り変わる時代や交通体系の中でどんな活動をしてきたかを振り返る、最後の企画展。「始」「夢」「活」「進」の四分野に分け、開会式招待者名簿、同館展示計画、ベルギーエンジン、0系新幹線電車・キハ81形ディーゼルカー搬入写真、収蔵資料・パンフレット類などを展示。四月六日(日)まで開催中②保存車両大公開……こうはく



→「52年の軌跡展」に展示中の写真。上は「入館300万人達成記念セレモニー」(昭和46年)、下は「みんなで入館」(昭和38年頃)

←「保存車両大公開」で公開中の0系新幹線の先頭車両①と同ビュフェ車の内部②



乗り物大公開編→閉館にあたり車両整備を終えた屋外展示場の車両や、普段公開することの

なかった実物車両などを公開。車両内部が見られる最後のイベント。公開されているのはEF

52形電気機関車1号車、0系新幹線電車(先頭

車グリーン車:ビュフェ車)、スシ28形301

号食堂車、マロネフ59形1号寝台車、80系

電車(制御車)、キハ81形ディーゼル動車3号

国鉄東名ハイウェイバス1号車、エプロ・コマ

ンダー680F型(航空機)。二月二十日(日)ま

での日曜日及び三月十一日(金祝)・二十二日

(土・二十九日(土)の十時半〜正午と十三時〜

十七時。公開スケジュールは問い合わせを③展

示用模刻蔵出し大公開展「キハ80系気動車、

10系客車(以上1/20)、EF80形電気機

関車(1/15)、チ300形貨車(1/5)など

大きなサイズの鉄道模型を約二十点。四月八日

(日)まで第八室で開催中④パノラマ運転→平日

三回、土日祝日五回→十〜十七時入館、月曜休

館(祝日なら開館)翌火曜休、火曜も祝日なら振

替休なし、春休みは開館。高校生以上四百円、

四歳〜中学生五百円。JR弁天町駅すぐ。 ☎八五

八一・五七七。

●港図書館

①第八回みなとふれあい福祉のひ

ろばおたのしみ会→くべつばん→二月一

日(土)じゅたんコーナーで。絵本の読み聞か

せ、パネルシアターなど。対象は幼児〜小学生・

申込不要、先着三十名。一回目は十一時半〜正

午、かたりの会々々々、一回目は十四時〜十

四時半(絵本の会みなとが担当)②「図書展示

「図書館に寄贈していただいた時代小説文庫本」

展→時代小説は近年、人気シリーズ登場などで

予約も多く、年配者を中心に大変な人気。寄贈

に感謝を込めて三月二十日(日)まで開催中③「図

書展示「あなたにこの本を」展→三月一日(土)〜

新刊本から図書館員おすすめの本を紹介④おたのしみ会Ⅱ毎週水曜十五時半～十六時、じゅうたんコーナーで。幼児を対象に、絵本の読み聞かせや紙芝居、パネルシアター、手遊びなど。申込不要⑥あかちゃんのおたのしみ会Ⅱ毎月第一金曜日(三月は七日)の十一時～十一時半、じゅうたんコーナーで。赤ちゃんと保護者を対象に、赤ちゃんが絵本に親しめるよう工夫。申込不要⑥図書展示「大阪を舞台にした小説」展Ⅱ二月二十八日(金)まで開催中▽いずれも問い合わせは ☎六五七六・一三四六 港図書館へ。

●関西フィルハーモニー管弦楽団・大阪市中央公会堂特別演奏会「古典の真髄」 大阪市中央



→指揮を担当する関西フィルハーモニー管弦楽団首席指揮者・藤岡幸夫さん(©SHINY AMAGISHI)

→コントラバスの独奏を担当する石川滋さん



公会堂について「この雰囲気はまるでヨーロッパの伝統的ホールだ」「大理石と木が生み出す温かな響きが心地よい」「この貴重な歴史遺産を古典演奏のメッカにしたい」と熱く語る同楽団首席指揮者・藤岡幸夫さんのタクトで傑作の真髄に迫る人気シリーズ。今回は欧米の諸楽団で首席奏者を務めた石川滋さんがゲスト。コントラバスのソロ演奏はめったになく、その重低音が鳴り響く貴重な機会となると共に、二人の希有な才能が、関西が誇る文化遺産の中で縦横に交錯する。演奏曲目は、①フエーバー：「魔弾の射手」序曲②ボツニージ：「コントラバス協奏曲第2番」短調(石川さんがコントラバス独奏)③メンデルスゾーン：「交響曲第3番」短調作品56「スリットランド」。三月十二日(金)

祝)十五時から大阪市中央公会堂(地下鉄「淀屋橋」駅より徒歩約五分)で。大人・一般三千円、高校生(十八歳以下)千五百円(全席指定・消費税込)。 ☎八五七七・二三八一。

●井大町市民学習センター「2014春のセンターマツリ」 同センター登録の生涯学習グループが日頃の活動の成果を作品展示や舞台発表で披露する恒例イベント。二十年間の感謝を込め開催する。三月六日(木)～十八日(日)の九時半～二十一時半(日曜日と最終日は十八時半まで。舞台発表は九日(日)十一～十六時。舞台プログラムや一日体験教室の日程は要問い合わせ。

お茶席は九日十一時～(なくなり次第終了)。各日昼にロビーライブ、十五～十八日には講師による作品づくり・デモンストラーション&体験コーナーあり。 ☎八五七七・一四二〇。

●井大町市民学習センター「こっぱんのつたこころのつた」 次世代へ歌い継ぎたい日本の歌を、本格的なオペラ歌手の歌声と共に、背景やエピソードを学びながら楽しむ「レクチュアコンサート」シリーズの六回目(最終回)。今回は「卒業、別れ、そして旅立ち」がテーマ。出演

はソプラノ…小堀史絵さん、バリトン…橋茂さん、ピアノ…金岡優子さん。企画・構成・司会

みづひ

は太田道宏さん(関西フィルハーモニー奏者)。曲目は「仰げば尊し」「蛍の光」「巢立ちの歌」「贈る言葉」「卒業写真」「学生時代」「出発の歌」他。三月十一日(火)十九時から同センター講堂で。料金は

一般千五百円(前売千二百円)、小・中学生八百円。

定員百二十名(先着順)▽申込方法など詳細は同センター(☎八五七七・一四二〇)へ。

●**弁天町市民学習センター・弁天シネマ倶楽部**

『わが谷は緑なりき』 「心に残る名作映画を

低料金で多くの市民に」と同センターが企画した上映会の三十三回目。貧しくとも誇り高く誠実な炭鉱夫の一家を描いた感動の家族ドラマ。



「弁天シネマ倶楽部『わが谷は緑なりき』から

監督はジョン・フオード、出演はウォルター・ピ

ジョン、モーリン・オハラ他。一九四二年アメリカ。モノクロ、一一八分。三月十五日(土)十

時と十四時から講堂で。料金は一人一回八百円

(前売五百円)。定員は各回先着百名。☎八五

七七・一四二〇。

●**弁天町市民学習センター「世界にひとつ『わ**

が町』紙芝居を作ろう」 我が町の魅力を手作

り紙芝居で。写真などを元に画用紙に絵の具

やクレヨンで描き、ミニ発表会も。二月二日(日)

十三～十八時。定員二十名(多数抽選)。参加費

五百円(教材費)。講師はピーマンみもとさん(紙

芝居作家・実演家)。申込は往復はがきかインタ

ーネットから来館で(二月二十一日必着)。詳細は

☎八五七七・一四二〇同センターへ。

●**ギャラリー&カフェ風庵「クラフト樺展」** 丹

後半島の工房、クラフト樺(京都府与謝野郡与

謝野町金屋「加悦」芸の里 ☎〇七七一・四三

・二五五四)による草木染製品や手織製品、木

の小物家具を一堂に。太陽と雨と大地に育ま

れた草木の色と木の温もりが伝わる。風庵は南

市岡二二二・一〇 繁栄商店街内、☎四九六五・

五九八、十時半～十六時開館。日曜休館。

●**市岡寄席** 市岡住民が運営する地域寄席の三

回目。市岡在住の落語家桂福丸さん(桂春団治

一門)の落語一席を楽しむ。二月十六日(日)十四

時から紫雲山西明寺(市岡二二・一四、☎八五

七二・五八二六)で。先着八十名。菓子付き。抽

選会あり。運営協力金としてカンパ歓迎。主催

は市岡寄席実行委員会(市岡地域活動協議会広

報部会、市岡連合振興町会、紫雲山西明寺、繁

栄商店街振興組合など市岡の諸団体や個人から

成る。桂福丸さんは灘中・灘高・京都大卒。英語

落語でアメリカ公演。二〇〇七年福団治入門。

天満大神繁昌亭やTV番組に出演。

●**ガラスアートナカイグループ「ガラスアート**

NAOMI教室作品展」3原色で色あそび・光と

影」 伝統の京都手描き友禅手糸目技法を応用

し、三原色を基本に竹串で色遊び。ガラス特有

の透明感・幻想感を楽しむ。港区の風景を含

む約二十点。三月三日(月)～十三日(木)の各九

～十七時に港区民ギャラリー(港区役所一階)で。

鑑賞無料。☎八五七六・二三四四 金元(磯路)。

ひとくち伝言板

●介護ベッド無料で譲ります 要分解・引き取り。希望者は☎六五七一・四八三六港新聞へ。

●犬の里親になって 生後約七カ月オス雑種。外で寒さに震えていました。無邪気で少々やんちゃ。☎〇九〇・五八九八・一九四五 松田。



ひとくちPR

(1行)税込1000円

●NPOみなと同ケアセンター ①介護や老

いにかまわる相談に乗ります②介護を受けるためのややこしい手続きを代わりにやります③アイサービスは送り迎え付きで入浴・昼食・手芸・ゲーム・テレビ鑑賞・カラオケ・囲碁・将棋・麻雀・体操・おやつなどを楽しめます④訪問介護は買い物・掃除・洗濯・通院などのお手伝い

をします。問い合わせはお気軽に☎六五八三・四八八〇、FAX六五八三・一一二二へ。

●あなたのふとんが生まれ変わります! 綿も羽毛も掛も敷も、熟練職人が心込めて仕立て替

え。シングル掛(敷)ふとん二万円。ふとん館

ひらのや(南市岡二・一・八 繁栄商店街東入口フリーダイヤル〇二〇・四二四九・五五)。

●レンタルフリーボックス 一カ月二〇〇

一八〇〇円。鍵付きガラスケース 棚上陳列スペース・ハンガー、足元置きカゴなどの月極レ

ンタルも。コスメハウスナナイロ(南市岡二・二・九 繁栄商店街内)☎六五八六・一九五。

●アルバイト急募 週一回の新聞配達と月一回

の集金を都合のいい時間に。港民主商工会(夕 四・一・一〇・二六、☎六五七二・七八六七)。

●放課後・春・夏・冬休みは学童保育へ 入所児童

集。指導員が安全・健全な家族的に遊びや遊びを指導。体験可。☎六五七五・〇三三五ありんこ。

●ボクササイズでシェイプアップ! 女性も

小・中・高生も楽しく練習。親切指導。家族的雰囲気。月会費五千円(無期限十枚つづりチケット五千円)。入会金二万円を現金半額。練習日

は月・水・金の十九時半〜二十時半。港ボクシングジムは三先一・二三・九(地下鉄朝潮橋駅南側の歩道橋すべの裏通り)。http://ameblo.jp/minatogyu/

●何でも書きます、まとめてます 手紙・案内・報告・宣伝・司会等の文案。自分史・社史・団体史等の聞き書き。新聞・広報・書籍・会報等の取材・編集。☎六五七一・四八三六 港新聞・飯田編集事務所。

読者プレゼント

※いずれもハガキに今月号の感想とプレゼント名を書いて20日必着で港新聞へ。

●交通科学博物館 (三三文化案内) 招待券をへア2組に。

●関西フィル「古典の真髄」(三三文化案内) 招待券をへア1組に。

●弁天シネマ倶楽部『わが家は緑なりき』(三三文化案内) 招待券をへア2組に。

●あながいおまる一座『大阪希望館』(演劇カイド) 招待券をへア2組に。